中學國文教科書

卷九

41747
教科書文庫
4
810
41-1941
20000
71503

資料室

文部省檢定濟
昭和十六年十一月十三日　中學校國語漢文科教科用

吉田彌平編
石井庄司補訂

中學國文教科書

修正三版

中等學校教科書株式會社

広島大学
教
71503
図書

42
810
昭16

中學國文教科書 卷九

目次

一 道の國日本……深作安文 一
二 大和錦……一三
三 百蟲譜……横井也有 二〇
四 大原御幸……〔平家物語〕 二五
五 狩野芳崖……岡倉覺三 三四
六 寺子屋……竹田出雲 四三
七 平安朝時代の文學…… 五三

八　御堂關白の幼時……〔大鏡〕　六六
九　法成寺の造營……〔榮華物語〕　七〇
一〇　國文學の研究……藤村作　七五
一一　土佐日記鈔……紀貫之　八〇
出立ち……八七
海の上……八九
都入り……九四
一二　吾妻下り……〔伊勢物語〕　九七
一三　かぐや姫……〔竹取物語〕　一〇〇
一四　愚禿親鸞……西田幾多郎　一二五
一五　おもかげ……一二九

一枚起請文……法然　一一九
學道……道元　一三一
念佛……親鸞　一三三
土牢御書……日蓮　一三四
一六　大丈夫の覺悟……幸田露伴　一三五
一七　新島守……〔增鏡〕　一三〇
一八　月の前……上田秋成　一三九
一九　石濱の雨……加藤千蔭　一四七
二〇　芳宜園大人……村田春海　一五〇
二一　縣居の大人の御さとし言……本居宣長　一五四
二二　山庵雜記……北村透谷　一五六

二三　求道……橋田邦彦　一六〇

目次終

中學國文教科書　卷九

一　道の國日本

深作安文
倫理學者
文學博士
元東京帝國大學
教授
明治七年（一八七四）
茨城縣生

神勅
葦原の千五百秋の瑞穗の國は是吾が子孫の王たるべき地なり爾皇孫就いてしらせさきくませ寶祚の隆えまさんこと當に天壤と窮りなかるべし
（日本書紀）

我が大日本帝國は道を以て建設せられ、道を以て存立しつゝある國である。即ち我が國は道の國であるといふことが出來る。皇祖天照大御神が皇孫瓊々杵尊に下された神勅が我が國體の眞の姿相を解するに最も有力な御言葉であることは、何人も知つてゐる事であるが、神勅以前にも我々の注意すべき詔勅のあることを忘れてはならぬ。それは天つ神が諸冊二尊に賜うたものである。即ち「豐葦原の千五百秋の瑞穗の國あり。宜しく

汝往きてこれをしらすべし」といふのである。我々はこの詔勅から、第一、日本國土の豐沃を讃美することと、第二、君が民に臨むに德を以てする政治、卽ち德治主義の政治の御主張とを窺ひまつることが出來る。

「豐葦原の千五百秋の瑞穗の國」とは、實によく日本國土の豐さを表現せられた御言葉である。「これをしらすべし」といふ御言葉は、「民に臨むに德を以てせよ」との御旨趣に外ならぬのである。「しらす」は敬語であつて、その不定詞は「しる」である。卽ち治者たる御方が正確に被治者の實生活を御認識遊ばすことである。正確に被治者の實生活を御認識遊ばされゝば、中には病氣にかかつてゐる者もあり、貧困に惱んでゐる者もあり、その他種々の困難、種々の苦痛に惱んでゐる者のあることを御承知遊ばすやうに拜察せられる。この御認識に伴なつて、治者の御腦裏に喚起せられるものは、民を憐み給ふまごころでなければならぬ。天下の青人草をどこまでも慈しみ給ふまごころでなければならぬ。そこに德治主義の政治の御出發があつて、恰も我が子の如く人民を憐み給ひ、恰も我が子の如く人民を慈しみ給ふのである。これが「しらす」の御政治であると拜察せられる。畏くも今上天皇におかせられては、昭和二年小笠原島と奄美大島とに行幸遊ばされた際、侍醫をして島民のうち病氣にかゝつてゐる者を診察せしめ給うたやうに拜承してゐる。一天萬乘の御方の御脈を拜診し奉る侍醫から、忝くも至尊の御思召の下に診察を受ける光榮を擔つた島民は、いかばかり感激の涙に咽んだであらうか。これが取りも直さず「しらす」の御政治である。德治

奄美大島
鹿兒島縣大島郡薩南諸島のうち南部の諸島を奄美諸島といふ又他國の大島と區別してこゝの大島を奄美大島といふ古名海見島

主義の御政治である。

かやうに治者たる御方がまごころをもつて人民に臨ませたまひ、人民もまたまごころをさゝげてこれを仰ぎ奉り、これに仕へ奉ることとなるのである。このまごころとまごころとの直接接觸が我が國の美風中の美風たる君民一體といふ事實、上下一心といふ事實を生み來るのである。東西はいかに廣くとも、古今はいかに久しくとも、我が國のやうな君民一體、上下一心の事實は絶えて他國に存せぬところである。これ他國には我が國において見るやうな德治主義の政治が行はれないからである。明治天皇の御製に、

葦原のみづほの國のよろづ代もみだれぬ道は神ぞ開きし

と拜せられるが、これは我が國の道の國であることを詠み出でさせ給うたものであると恐察せられる。

次には神勅である。これには三箇條の事柄が含まれてゐるやうに拜察せられる。即ち日本國土の豐沃讃美と、德治主義の御主張と、血統主義の御主張とである。

「葦原の千五百秋の瑞穗の國」とは、この國の豐沃讃美である。「就いてしらせ」とは、德治主義の御主張である。この二點は上陳の詔勅に窺はれる所であるが、更に神勅には、「是、吾が子孫の王たるべき地なり」とあつて、君位繼承の上に血統主義の御主張があるのである。血統主義とは、君位相傳の原理を血統とする立場である。東西の君主國に於て、君位相傳を支配した原理に三つある。德と力と血統と、即ち是である。德の場合は廣く天下に有

徳者を物色して、これに天位を讓るのであり、力の場合は武力を働かせて當時の君主に取つて代るのである。支那で堯が舜に位を讓り、舜が禹に位を讓つたのは、卽ち徳を原理とする場合であつて、之を禪讓といふのである。同じく支那で殷の湯王が、暴君であつた夏の桀王を放ち、周の武王が、虐主であつた殷の紂王を伐つたのは、力を原理とする場合である。支那では之を放伐と呼んでゐる。かの支那に易姓革命の存するのは、この禪讓・放伐の必然の結果である。元來、徳は、或は良師に從ひ、或は修養に工夫を怠らねば、之を具へることが出來、力は英雄豪傑の資を以て人心を收攬することを務めれば、之を養ふことが出來る。卽ち徳と力とは何れも人間分内のことであつて、人爲・人力によつて左右されるのである。之に反して、血統の場合は、その性質上

迥かに人爲・人力を超越して、君位に絶對性を與へ、それをして確固不動のものたらしめる。その結果、君は永く君におはしまし、民は永く民であつて、君民の大義は儼として存し、君主たる御方は專らその心を治國安民の上に傾け給ふべく、すぐれた政治は、これが自然の結果として期待し奉られるのである。この場合、君民の關係は恰も天地のそれの如くである。天を地とすることも出來ねば、地を天とすることも出來ぬ如く、君を民とすることも出來ねば、民を君とすることも出來ないで、君と民との分際が極めて明瞭である。國家の永恆性はこゝに始めて備はるのである。我が國が上下三千年の長く且無瑕の歷史を有するのは、この君位相傳の方式の存するが爲である。三千年の國家の歷史が我が國體を尊嚴ならしめるのではなくて、我が國體の本

質そのものが三千年の國家の歴史を造り出したのである。

かやうにして、自然國體の點から國家が三通りに區別せられる。徳を以て民を治めるのを王道といひ、この徳を君位相傳の原理となす國を王道の國といふのである。力を以て民を從へ、表に徳を裝ふを覇道といひ、この力を君位相傳の原理となす國を覇道の國といふのである。兩國共に君位が絶對性を有する事の出來ないのは、徳も力も人間分内のものであるからである。終りに、一系の皇統を承け給ふ君主が、まごころを以て民を治めたまふことを皇道といふのである。隨つて血統を君位相傳の原理となし、徳を政治の原則となす國を皇道の國といふのである。我が帝國がまさしくこの國であることは、改めて言ふを要しない。我が國で、君主の御方が御姓を有し給はぬのは、我が君位が絶對であるからであつて、我が國の君位は千秋萬古渝らないのである。凡そ國家にとつて最も基本的な條件は主權の不動といふことであるが、我が國は優にこの條件を充たしてゐる。次に國家の存立にとつて肝腎な條件は善政であるが、我が國はこの條件もまたこれを充たしてゐる。我が國の主權は永久に不動であつて、我が皇室の政治の御方針は、また永久に徳治主義であらせられる。これが我が帝國の眞の姿相である。

以上は專ら建國の事情から我が帝國の眞の姿相を述べたのであるが、進んで人民の側から同じ考察を試みて見たい。人のよく知る如く、我が國は族制的國家であつて、畏くも皇室は我が國

五部神
天兒屋根命（中臣氏の祖）
太玉命（忌部氏の祖）
天鈿女命（猿女氏の祖）
石凝姥命（鏡作氏の祖）
玉祖命（玉作氏の祖）

忠良ノ臣民
教育勅語にある御語

の大宗家におはしまし、人民はその末流を辱うし、上にも下にも君民同源の信念がある。北畠親房卿の「君も臣も神明の光胤を受け、或はまさしく勅を受けし神たちの苗裔なり」といはれたのが、即ちこれである。「勅を受けし神たち」とは、皇祖から皇孫に侍し奉るべく御命令を受けた五部神（いつとものをのかみ）を指すのである。これらの神たちは、それ〴〵祭祀・禁衛守護・大膳・供奉等の職を分擔して皇孫に仕へ奉つたのである。その他、皇孫に陪從して降り來つた神々は八十萬神であつた。この故に、我が國では獨り君主たる御方が皇祖皇宗の御教に從つて「しらす」の御政治をなし給ふばかりでなく、人民も亦同じく皇祖皇宗の御教に從つて、皇室に仕へ奉るのである。即ち君主たる御方は祖訓に從つて仁君明主とならせ給ひ、人民も亦同じく祖訓に從ひ奉つて「忠良ノ臣民」となるのである。祖訓は君道の規矩であつて、同時にまた民道の準繩である。我が國では、君民擧つて共通一箇の道德的規準に從つて國家を組立て、國家を存立させつゝあるのである。明治天皇の御製に、

國民は一つ心にまもりけりとほつみおやの神の教を

とあるのを反復して味はひ奉るべきである。又教育勅語に「斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所」といふ御言葉が拜せられるが、こゝに「子孫」と宣らせられたのは、皇祖皇宗の御子孫を指し給ふやうに拜察せられる。この故に、我が國では、祖訓の前には、畏くも君も民も齊しく敬愼であらねばならぬのである。即ち君と民とが同一祖訓によつて結びつけられて、君民一體の事實を生み、上下一心の事實を生

明治天皇
第百二十二代の天皇
明治四十五年(一九一二)崩御
寶算六十一

靈元天皇
第百十二代の天皇
享保十三年(一七二八)崩御
寶算七十九

後村上天皇
第九十七代の天皇
正平二十三年(一三六八)崩御
寶算四十一

むのである。我が帝國が道德的に建設せられ、道德的に存立しつゝあることは、少しの疑も挾まれないのである。我が國は道をその本質としてゐる國である。卽ち道の國である。

(思想と國家)

二　大和錦

明治天皇御製

さゞれ石のいはほとならむ末までも五十鈴の川の水はにごらじ

靈元天皇御製

すべらぎのわが道遠く守らなむ御裳濯川の末の末まで

後村上天皇御製

後醍醐天皇
第九十六代の天皇
延元四年(一九九九)崩御
寶算五十二

伏見天皇
第九十二代の天皇
文保元年(一九七七)崩御
寶算五十三

龜山天皇
第九十代の天皇
嘉元元年(一九六三)崩御
寶算五十七

後嵯峨天皇
第八十八代の天皇
文永九年(一九三二)崩御
寶算五十三

とりの音におどろかされてあかつきの寢ざめしづかに世を祈るかな

後醍醐天皇御製

急ぐなる秋の砧の音にこそ夜寒の民の心をも知れ

伏見天皇御製

神や知る世のためとてぞ身をおもふ身のためにして世をば祈らず

龜山天皇御製

世のために身をば惜しまぬこゝろとも荒ぶる神は照らしみるらむ

後嵯峨天皇御製

この君の御世かしこしとくれたけのすゑ〳〵までもいか

後鳥羽天皇
第八十二代の天皇
延應二年（一二〇〇）崩御
寶算六十

正岡子規
名は常規
俳人・歌人
伊豫國（愛媛縣）松山生
明治三十五年（一九〇二）歿
年三十六
蹟筆
從軍の首途にかへらしとかけてそちかふ梓弓矢立たはさみ首途すわれは子規

稅所敦子
歌人
掌侍
京都生
明治三十三年（一九〇〇）卒
年七十六

でいはれむ

後鳥羽天皇御製

おくやまのおどろが下もふみわけて道ある代ぞと人に知らせむ

正岡子規

櫻咲く御國しらすともゝしきの千代田の宮に神ながらいます

正岡子規筆

稅所敦子

井出曙覽
歌人
越前國（福井縣）福井生
明治六年（一八七三）卒
年五十七
贈正五位

平野國臣
勤王家
福岡藩士
元治元年（一八六四）卒
年四十三
贈正四位

筆蹟
數ならぬ竹の下葉の露の身もしなばやしなん大王の邊に

國臣

佐久良東雄
勤王家
常陸國（茨城縣）の人
萬延元年（一八六〇）卒
年五十
贈從四位

なれて汲む筒井の清水深しとも知らぬや御代のめぐみならむ

井出曙覽

國を思ひ寢られざる夜の霜の色月さす窓に見る劍かな

平野國臣

數ならぬ草の下葉の露の身も死なばや死なむ大君の邊に

平野國臣筆

佐久良東雄

すめろぎにつかへまつれと我を生みし我が父母は貴くありけり

吉田松陰
勤王家
長州藩士
安政六年（一八五九）
卒
年三十
贈正四位

加納諸平
國學者
遠江國（靜岡縣）
の人
安政四年（一八五七）
歿
年五十二

香川景樹
號は桂園
因幡國（鳥取縣）
鳥取生
天保十四年（一八四三）
卒
年七十六
贈從五位

筆蹟
七夕草
棚機に糸すゝぎをそ手向けるこは夏引の手ひきならねと　景樹

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬともとゞめおかまし大和だましひ

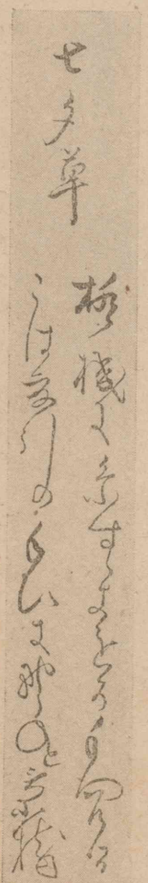
吉田松陰

君がため花と散りにしますらをに見せばやとおもふ御代の春かな

加納諸平

すべらぎは現津神なり秋つ島動くべき世のあらむと思ふな

香川景樹



香川景樹筆

平田篤胤
國學四大人の一
秋田國（秋田縣）
秋田生
天保十四年（一八四三）
卒
年六十八
贈正四位

本居宣長
國學四大人の一
伊勢國（三重縣）
松阪生
享和元年（一八〇一）
卒
年七十二
贈從三位

筆蹟
年のはしめによめる
さし出る此日の本のひかりよりこまもろこしも春を知るらむ　宣長

賀茂眞淵
岡部藩士
家の號は縣居
國學四大人の一
遠江國（靜岡縣）
岡部生
明和六年（一七六九）
卒
年七十三
贈從三位

雲となりあるは雨とも降りしきて神代の道に身をやつくさむ

平田篤胤

物みなはかはりゆけども現津神わが大きみの御代はとこしへ

本居宣長

本居宣長筆

大御田の水泡も泥もかきたれて取るや早苗は我が君のためめ

賀茂眞淵

荷田春滿
國學四大人の一
京都稻荷の祠官
元文元年（一三九六）
卒
年六十八
贈正四位

ふみわけよ大和にはあらぬから鳥のあとを見るのみ人の
道かは

高山彦九郎
名は正之
勤王家
寛政三奇士の一
上野國（群馬縣）
の人
寛政五年（一四五三）
卒
年四十七
贈正四位

われをわれとしろしめすかやすめらぎの玉のみこゑのか
かる嬉しさ

三條西實隆
内大臣
天文六年（一二九七）
卒
年八十三
贈從一位

仰ぎ來てもろこし人も住みつくやげに日の本の光なるら
む

菊池武光
武將
吉野朝時代の勤
王家
九州の人
文中二年（一〇五五）
卒
贈從三位

ものゝふの上矢のかぶら一筋に思ふこゝろは神ぞ知るら
む

慈圓
慈鎭和尚
藤原忠通の子
延暦寺の座主
嘉祿元年（一八五）
寂
年七十一
たゞすの宮
京都市左京區紀
の森なる賀茂御
祖神社

君を祈る心の色を人問はばたゞすの宮のあけの玉垣

前大僧正慈圓

素性法師
俗名良岑玄利
平安朝時代の歌
僧
三十六歌仙の一
橘諸兄
奈良朝の末頃の
名臣
世に井出左大臣
といふ
天平寶字元年（一
四七）卒
年七十四

ふして思ひ起きて數ふるよろづ代は神ぞ知るらむ我が君
のため

素性法師

大舍人部千文
防人
鹿島の神
今の官幣大社鹿
島神宮
祭神は武甕槌神
國家鎭護の武神

ふる雪のしろかみまでに大君につかへまつればたふとく
もあるか

橘諸兄

石上大夫
防人

あられふり鹿島の神を祈りつゝすめらみくさにわれは來
にしを

大舍人部千文

石上大夫

横井也有
俳人
名古屋藩士
天明三年（一七八三）
歿
年八十二

荘周
支那周代の思想家
荘子の内篇はその著であらう
昔者荘周夢ニ胡蝶ト爲ル。栩々然トシテ胡蝶ナリ、自ラ喩ミテ志ニ適フカナ。周ナルコトヲ知ラズ。俄然トシテ覺ムルトキハ、則チ蘧々然トシテ周ナリ。周ノ夢ニ胡蝶トナレルカ、胡蝶ノ夢ニ周トナレルカヲ知ラズ。（荘子）

古今の序
草に鳴く螽水に住む蛙の聲を聞けば生きとし生けるものいづれ

大船に眞梶しゞぬき大君のみことかしこみ磯廻するかも

三百蟲譜

横井也有

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものの限りなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ荘周が夢もこのものには託しけめ。

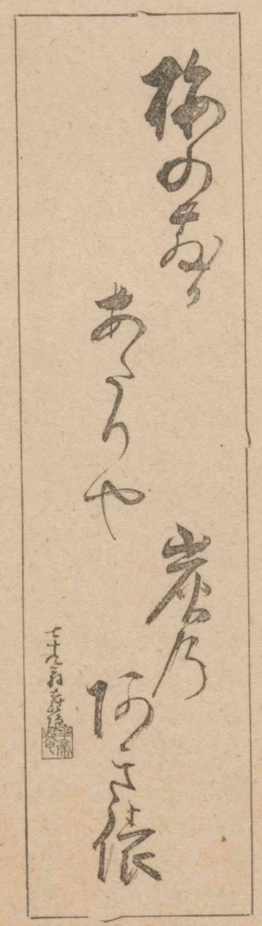
蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし。古池にとんで翁の目覺したれば、このものこと更にも誇りがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。やゝ日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗絞るこゝちす。されば初蝶とも初蛙ともいふことを聞かず、このものばかり初蟬といはるゝこそ大

やがて死ぬ
やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲（芭蕉）

筆蹟
梅の散るあたり
や炭のあさ俵
七十九翁蘿隱

貧の學者
晉ノ車胤貧ニシテ常ニハ油ヲ得ズ。夏月ニハ練嚢ニ數千ノ螢火ヲ盛リ、書ヲ照ラシ以テ之ヲ讀ム。夜ヲ以テ日ニ繼グ。（晉書）



横井也有筆

きなる手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えず」と、このものの上は翁の一句に盡きたりといふべし。

螢はたぐふべきものもなく、景物の最上なるべし。水にとびかひ、草にすだく。五月の闇は只このものの爲にやとまでぞ覺ゆる。然るに貧の學者に捕られて油火の代りにせられたるは、このものの本意にあらざるべし。歌に螢火と詠ませざるは殊の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

茅蜩は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草

古代朝敵のはじめ
古事記・日本書紀に見えた土蜘蛛

頼光をさへ
土蜘蛛の精が僧に化けて源頼光を悩ましたといふ傳說が土蜘蛛草子・太平記劍卷に見えてゐる

に露おくころならん。つく〳〵ぼふしといふ蟬は、つくしこひしともいふなり。「筑紫の人の旅に死して、このものになりたり」。と世の諺にいへりけり。哀は蜀魂（ぜつこんぜつ）の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蜘蛛はたくみに網を結んで、ひそまつて物を害せんとす。ひとへに奸賊の心ありていとにくし。古代朝敵のはじめとして、頼光をさへおびやかしたる、いと恐し。さはいへ、廢宅の荒れたる軒に、蟬の羽などかけ捨てたるはいさゝかあはれ添ふ折もあらんか。彼はかひ〳〵しく巢つくりてこそあれ、東海道にちりぼひたる宿無しをば、くもとはいかでいふやらん。

脊蟲・吝蟲（しはむし）は名のみにして蟲ならず。油蟲といふは、蟲にありて憎まれず、人にありて嫌はる。

蜉蝣
長生得ル者無ク、擧世蜉蝣ノ如シ。（白樂天）

蓼食ふ蟲
蓼蟲辛ヲ忘ル。（左思）

槐安の都
淳于棼、醉ヒテ夢ニ大槐安國ニ入リテ王ニ見ユ。王曰ク、吾ガ南柯郡ニ卿ヲ屈シテ守トナスト。凡ソ二十載。使者送リテ穴ヲ出ヅ。遂ニ寤ム。古槐下ニ蟻穴ヲ尋ヌレバ、乃チ槐安國ナリ。又一穴直ニ南枝ニ上ル。即チ南柯郡ナリ。（異聞集）

千丈の堤
千丈ノ堤モ螻蟻ノ穴ヲ以テ潰ユ。（韓非子）

蠶の生涯は世のために終り、火取蟲は誰がために身を焦すや。蜉蝣ははかなき例に引かれ、蓼食ふ蟲は物好の謗となれり。同じ寶の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、黃金蟲は賤し。蟻は明暮に忙しく、世の營みに隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めて止まず。いつか槐安の都を逃れてその身の安きことを得ん。さるも便りあしき方に穴を營みて千丈の堤を崩すべからず。

蝸牛は只水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらん。家は持ちたれども、ゆく先々を負ひ歩くは、雲水の安きにも似ず。

蟷螂の痩せたるも、斧をもちたる誇よりその心いかつなり。人の上にもこの類はあるべし。

蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。たゞ原・吉原を駕籠にの

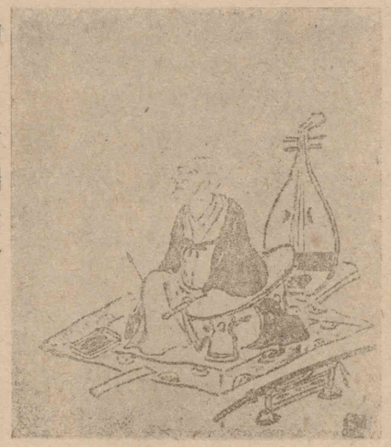
蟷螂の斧
蟷螂ノ斧ヲ以テ隘車ノ隧ヲ禦ガント欲ス。（陳琳）

原
東海道の宿
靜岡縣駿東郡原町

吉原
東海道の宿
靜岡縣富士郡吉原町

りて富士を眺めゆく人には似たり。

促織（はたおり）・鈴蟲・轡蟲はその音の似たるを以て名によべり。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名を附きたるならん。毛生ひ、むくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯らし、人に疎まる。一在所に二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲の類なるべし。



横井也有

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の頃端居珍しき夕、始めてほのかに聞きたらん、又は長月のころ力なく殘りたるは、寂しき方もあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊遣焚く里の煙など、且は風雅の道具ともなれり。藪蚊はこ

竹林の七賢
嵇康
阮籍
山濤
向秀
劉伶
阮咸
王戎

法皇
後白河法皇

文治二年
後鳥羽天皇の御代（一八四六）

建禮門院
平　憲子
平　清盛の女
高倉天皇の中宮
安德天皇の御母

大原
京都府山城國愛宕郡の山村
京都の北十六粁

北祭
賀茂の葵祭
四月中の酉の日
今は五月十五日

とに烈しきを、かの竹林の七賢の夜話には、いかに團扇のひまなかりけん。（鶉衣）

四　大原御幸

かゝりし程に、法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御住居御覽ぜまほしう思し召されけれども、二月彌生のほどは嵐烈しう、餘寒も未だ盡きず、峯の白雪消えやらで、谷のつらゝも打解けず。かくて春過ぎ夏來りて北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人々には公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。

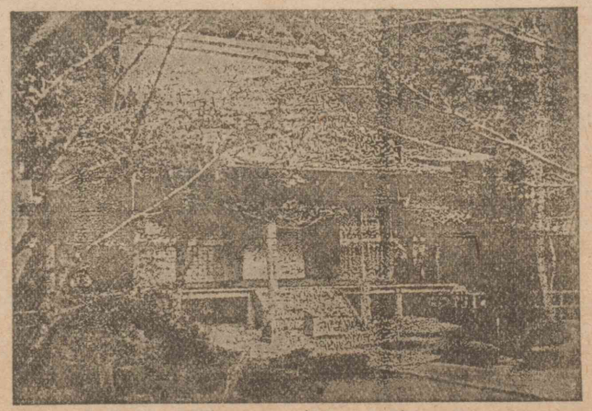
遠山にかゝる白雲は散りにし花の形見なり、青葉に見ゆる梢には春の名殘ぞ惜しまるゝ。頃は卯月二十日あまりの事なれば、

夏草の茂みが末をわけ入らせたまふに、始めたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、人跡絶えたるほども思し召し知られてあはれなり。

西の山の麓に一宇の御堂あり。即ち寂光院これなり。舊う造りなせる泉水、木立、よしあるさまの處なり。

「甍破れては霧不斷の香を焚き、扉落ちては月常住の燭を挑ぐ」とはかやうの處をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松に懸れる藤波

甍破れては　出所未詳



寂光院

のうら紫に咲ける色、青葉交りの遲櫻初花よりも珍しく、岸の山吹咲亂れ、八重立つ雲の絶間より山郭公の一聲も、君のみゆきを待ちがほなり。法皇これを叡覽あつて、かうぞ遊ばされける。

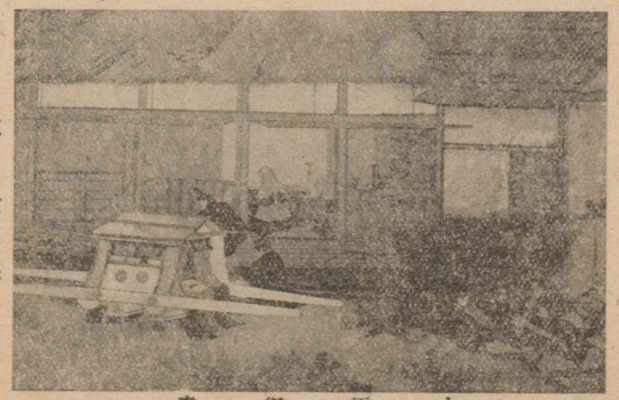
池水にみぎはのさくらちりしきて波の花こそさかりなりけれ

舊りにける岩の絶間より落ちくる水の音さへ故びよしある處なり。綠羅の垣、翠黛の山、繪に書くとも筆も及び難し。さて女院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦朝顏這ひかゝり、しのぶ交りの忘草、瓢簞屢空し、草顏淵が巷に滋く、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞を濕す」ともいひつべし。板の葺目もまばらにて、時雨も霜もおく露も、洩る月影に爭ひてたまるべしとも見えざりけり。後は山、前は野べ、いさゝを笹に風さわぎ、世に立たぬ身の習とて、憂

瓢簞屢空し　和漢朗詠集、橘直幹の句

き節しげき竹柱、都の方の言傳は間遠に結へるませ垣や、わづかに言とふものとては、峯に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これらが音づれならでは、まさきのかづら青つづら、くる人稀なる處なり。

法皇「人やある、人やある。」と召されけれども、御いらへ申す者もなし。ややありて老い衰へたる尼一人參りたり。「女院はいづくへ御幸なりぬるぞ。」と仰せければ、「この上の山へ花摘に入らせたまひて候。」と申す。「さこそ世を厭ふ御習といひながら、さやうの事に仕へ奉るべき人



大原村下　御山　御幸

五戒
殺生
偸盜
邪婬
妄語
飲酒

十善
不殺生
不偸盜
不邪婬
不妄語
不兩舌
不惡口
不綺語
不貪欲
不嗔恚
不邪見

紀伊二位
少納言藤原通憲の妻朝子

もなきにや。御痛はしうこそ。」と仰せければ、この尼申しけるは、「五戒・十善の御果報盡きさせたまふによりて、今かゝる御目を御覽ぜられ候にこそ。捨身の行に、なじかは御身を惜しませたまひ候べき。」とぞ申しける。この尼の有樣を御覽ずれば、身には絹・布のわきも見えぬものを結び集めてぞ着たりける。「あの有樣にてもかやうのことを申す不思議さよ。」と思し召して、「抑、汝は如何なる者ぞ。」と仰せければ、この尼さめ〳〵と泣いて、しばしは御返事にも及ばず。やゝありて涙をおさへて、「申すにつけて憚り覺え候へども、故少納言入道信西が女阿波内侍と申すものにて候なり。母は紀伊二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせたまふにつけても、身の衰へぬるほど思ひ知られて、今更せん方なうこそ候へ。」とて、袖を顏に押しあてて忍び

三尊
阿彌陀如來
觀音菩薩
勢至菩薩
善導
唐の高僧
八軸の妙文
法華經
九帖の御書
善導和尚の觀無量壽經の疏

あへぬさま、目も當てられず。法皇「げにも汝は阿波内侍にてあるごさんなれ。御覽じ忘れさせたまふぞかし。何事につけても只夢とのみこそ思し召せ」とて御涙せきあへさせたまはねば、供奉の公卿・殿上人も「不思議の事申す尼かな」と思ひたれば、「理にて申しけり」とぞ各〻感じあはれける。

蓮華門院御像
寂光院藏

さて女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子をひきあけて叡覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲を懸けられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚並に先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。蘭麝のにほひにひきかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。さて傍を叡覽あるに、御寢所と思しくて、竹の御竿に、麻の御衣、紙の衾なんど懸けられたり。さしも本朝・漢土の妙なる類數を盡くしし綾羅錦繡の粧も、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿・殿上人も、まのあたり見奉りし事ども今のやうに覺えて、皆袖をぞ絞られける。

大納言典侍局
平重衡の室

やゝあつて、上の山より濃き墨染の衣着たりける尼二人、岩のかけぢを傳ひつゝおり煩ひたる樣なりけり。法皇「あれはいかなる者ぞ」と仰せければ、老尼涙を抑へて、「花筐（はながたみ）」にかけ、岩躑躅取具して持たせたまひて候は女院にて渡らせたまひ候。爪木に蕨折添へて持ちたるは烏飼中納言維實が女、五條大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言典侍（すけのつぼね）局」と申しもあへず泣きけり。法皇

御涙を流させたまへば、供奉の公卿・殿上人も皆袖をぞぬらされける。

女院は「世を厭ふ御習といひながら、今かゝる有様を見えまゐらせんずらんはづかしさよ。消えも失せばや」と思し召せどもかひぞなき。宵々ごとの閼伽の水、むすぶ袂もしをるゝに、曉起の袖の上、山路の露もしげくして、しぼりやかねさせたまひけん、山へも歸らせたまはず、又御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせまし〳〵たる處に、内侍の尼參りつゝ花筐をば賜はりけり。

「世を厭ふ御習、何か苦しう候べき。早々御見參ありて、還御なし參らせ候へ」と申されければ、女院御涙を抑へて御庵室に入らせおはします。「一念の窓の前には攝取の光明を期し、十念の柴の

樞には聖衆（しゃうじゅ）の來迎をこそ待ちつるに、思の外の御幸かな」とて御見參ありけり。

女院涙を抑へて申させたまひけるは「今かゝる身になり候ことは一旦の歎申すに及び候はねども、後生菩提のためには悦と覺え候なり。いつの世にも忘れ難きは先帝の御面影。忘れんとすれども忘られず、忍ばんとすれども忍ばれず。たゞ恩愛の道ほど悲しかりけることはなし。されば、かの御菩提のために、朝夕の勤怠ること候はず。これも然るべき善知識とおぼえ候」と申させたまへば、法皇仰なりけるは「人間のあだなる習、今更驚くべきには候はねども、御有様見參らせ候に、せん方なうこそ候へ」とて、御涙せきあへさせたまはず。（平家物語）

悲母觀音像　狩野芳崖筆

五　狩野芳崖

岡倉覺三

一幅の濃淡、人天相分る。上は則ち無量光明の淨界なり、下は則ち五欲昏迷の穢土なり。大士の容顏端嚴にして、愁に和して微笑を含み、左手に楊柳を拈し、右手に寶瓶を傾け、瀉ぎ來る無明空中一滴慈悲の水は清魂の人間に歸るを送るものなり。赤子の合掌して仰いで菩薩を見るものは、無知清淨にして餘念を懷かず。亂山突兀、暮雲暗澹、煙冷やかに風荒る。憐むべし、呱々たる阿孺何處にか墜下し去りて、憂悲煩惱の長夜に迷ひ、那邊の淨地に向つて如意心蓮を發き、再び慈悲の海に遡るを得ん。嗚呼、これ芳崖狩野翁が畢生の傑作觀音大士の像なり。

翁嘗て人に語つて曰く、「人生の慈悲は母の子を愛するに若くはなし。觀音は理想的の母なり、萬物を發生煦育する大慈悲の精

岡倉覺三
美術經賞家
東京美術學校長
江戸生
大正二年卒
年六十二

無量光明
是レヨリ西方十萬億佛土ヲ過ギテ世界有リ。名ツケテ極樂ト曰フ。其ノ土ニ佛有リ、阿彌陀ト號ス：：。彼光明無量、十方ヲ照ラシ、障礙スル所無シ。（阿彌陀經）

五欲
耳目口鼻の欲と愛情の欲

ミケランジェロ
伊太利の畫家・彫刻家・詩人
（西暦一四七五―一五六四）

神なり、創造化育の本因なり。余この意象を描かんと欲する、ここに年あり。未だ適當なる形相を得ず」と。この圖は翁が最終の揮毫に係り、長逝に先だつこと纔かに四日、畫がき了へて、未だ款を署するに至らざりしものなり。蓋し翁平生の心事この一幅畫中に留存するものあらん。その筆墨の沈着醇厚にして、その賦色の明麗渾融なるは近世多く比類を見ず。特に意匠の高尚秀絶なるに至りては、技、道に進む者にして、遙かに古人を凌駕せんとす。尋常一樣、墨を玩び筆を弄し、花天月地に風流三昧を事とする者と時を同じうして語るべからず。彼のミケランジェロの畫がきたる創造（クリエーション）の圖は歐洲美術の神品と稱すべく、氣力豪邁にして布置雄大、唯見る、雲間の上帝雙手を伸して大地を指し、倏忽一箇の壯士を現出するを。彼は則ち上帝の命令念力を

羅馬レスト堂天井畫　ミケランジェロ筆

創造

以て人を創造するなり。これは則ち觀音の慈悲法力を以て人を發育擁護するなり。佛家發生の深理は自ら基敎造物の大旨と異なる所あり。その美術上の形相も亦隨つて同じからず。人若し畫中の心情を看破し去らば、豈妙悟の天外より落つるなからんや。哀むべし、この超凡の絶技を抱きたる人は、未だ天下に名を成す能はずして空

文政十一年
仁孝天皇の御代
（一八二八）

木挽町狩野畫所
德川幕府奥向の繪を掌り門生をも養ふ狩野四家の一

しく黄泉の客となれり。然れども翁の妙想は竟にミケランジェロをして美を擅にせしめざりしなり。

翁姓は狩野、文政十一年正月十三日長州に生る。幼名幸太郎。父を晴皐と曰ふ。家世、萩藩の畫師たり。父、性豪毅にして俠氣あり。自ら信ずること頗る固く、その子を訓ふること甚だ嚴正なり。翁が勇邁果敢の氣力は多く嚴君の鍛錬による。母、溫柔貞淑、その愛育慈養は翁の常に追念したる所にして、後年觀音の畫ある所以も亦これに基づく。翁の豪懷英氣、風雲を叱咤する筆を以て、時として情致纏綿、曉露の海棠に墜つるが如き一種幽婉の變體あらしめたるも、亦故あるかな。

翁、年十九、始めて江戸に來り、木挽町狩野畫所に入る。爾來十有餘年螢雪の功を積み、狩野門流の正格を練磨し、非凡の精妙を顯

安政六年
孝明天皇の御代
（一八五九）

周文
室町時代の畫僧
京都の相國寺に
ゐた

玉澗
支那南宋の畫僧
若芽の號

夏明遠
支那南宋の畫家

仇英
支那明代の畫家

雪舟
室町時代の畫僧

馬遠
支那南宋の畫家

夏珪
支那南宋の畫家

相阿彌
室町時代の畫家

し、當時祕訣と稱したる師門の口傳の如きも、暗合默會して先輩を驚かし、巍然として畫所屈指の名手たり。安政六年江戸城本丸燒失す。再建に當り、大廣間天井の裝飾は翁選ばれてこれを託せらる。然れども翁の心は未だ大いに安んぜざるものあり、一朝自ら悟る所ありて、遂に別天地を開かんとするに至れり。當時狩野の畫風漸く衰微に瀕し、粉本摸寫の弊最も盛にして、周文の遠山に玉澗の雁陣を横たへ、夏明遠の樓閣に仇英の人物を坐せしめ、以て自家の製作となす者あり。當時の一幅の丹青を解剖し去らば、雪舟の樹木・巖石、馬遠の蘆荻・流水、夏珪の牧牛、相阿彌の歸

狩野芳崖

帆を點々排列するに過ぎず。畫家の新案に係るものは纔かに雲煙と落款とのみ。翁の洞然大觀して自ら破格を企てたるは洵に已むを得ざりしなり。

一日童子あり、戲に虎を畫かく。眼はこれ兩々の丸子、耳はこれ雙々の遠山、脚はこれ四竿の老竹、斑文五六點、鬚毛兩三絲、添ふるに長大の尾を以てす。翁觀て大いに喜び、起舞して歎じて曰く、「これなる哉、これなる哉。雪舟の骨、雪村の氣、亦これに外ならず。畫の要は一意直到、唯心裏の影を以て紙上の形となすに在り。意盡くる所は則ち筆の盡くる所なり。氣力滿盈の間、豈一點の間筆を着くべけんや」と。これよりして筆墨を童子に與へ、白紙を以てその畫かく所に換へ、これを祕笈に藏し、夜靜かに人定まる後、孤燈を剪つてこれを展覽し、畫中の上乘禪に悟入する所あ

橋本雅邦
畫家
東京美術學校教授
明治四十一年（一九〇八）卒
年七十四

り。この時に於て翁の心事を解し、共に破格を期したるは、獨り橋本雅邦氏なりき。氏は翁と同日畫所に入る、時に年十三歲なりといふ。この兩畫伯、一は雄拔奇豪、一は渾厚着實、共に表裏提携し、新畫の端緒を開きたるは亦奇緣といふべし。

心機漸く熟して形相未だ成らず。新に生面を開きたる者の通弊として、忽ちにして奇僻に陷り、怪詭百出、滿幅の風雲魑魅魍魎を奔らせて同門の嘲を招き、師家の罵に遭ひぬ。されど、翁自ら信ずる所あり、敢へて一歩を退かざりき。憾むらくは世を擧つて俗陋、翁を知る者甚だ罕なり。慘澹辛苦嘗めざるなく、その死に先だつこと兩三年、始めてその心機と形相と調和するを得て、畫法の自在を成したるものの如し。觀音その他の傑作に至つては、畫格遠く古大家に入り、人をして驚絕せしむるに足ると雖

勝川
名は雅信
狩野派の畫家
明治十三年（一八八〇）歿
年五十八

も、その巧妙は既成の形相に非ずして、寧ろ含蓄にあり、未敷蓮華の香を包み、秋雲の雷電を藏するが如し。惜しいかな、未だ大いにその圓熟縱横の妙を揮ふに及ばずして逝く、年六十一。時に明治二十一年十一月五日なり。

翁人となり、內、忠實溫順にして、外、高邁俊逸なり。その父母に至孝なるは鄕閭の知る所にして、勝川門下に遊學したる時の如きは、一身節儉を守り、潤筆を得てもこれを私せず、鄕里に送り、以て父母旦夕の料に供したりといふ。技藝の上に在りては虛心坦懷、好んで人に問ひ、門下子弟の說と雖も、苟も取るべきあれば、喜び拜してこれを容れ、その圖樣を改むること屢〻なり。その自ら信じたる所を說くに至つては貴賤親疎の別なく、長談雄辯して意を盡くさざれば歇まず。翁又謠曲を愛し、舞を好む。常に舞

法の畫法と同一なる所以を說き、得意の事、得意の人に遇へば、婆娑として起舞し、旁人なきが若し。蓋し畫伯眼中唯畫あるのみ。顧ふに美術の大家たるものは自ら一家の美學を有す。或は心に感じて口にこれを言ふ能はざる者あり、或は默契して言ふを好まざる者あり。翁の如きはこれを言ふを喜びたる者なり。翁は畫理を以て天地萬物の眞理を發明せんと試み、佛家禪僧の妙悟、漢儒西哲の深旨、總べて丹青鏡裏に照映してその意義を判し、得失を論じ、仁義道德の大道、坐臥進退の庸行に至るまで、盡く取りて以て畫訣とせり。翁常に言ふ、「人生各自獨立の宗教なかるべからず。美術家の宗教には美術宗あり。復何ぞこれを他に求めんや」と。亦以てその造詣を見るに足るべし。（國華）

寺子屋
竹田出雲・三好松洛・並木千柳合作「菅原傳授手習鑑」の一節
武部源藏
菅丞相から書道の傳授を受け洛北芹生の里に寺子屋を開いて里の幼童を教へてゐる人
菅丞相の流謫の後、一子菅秀才をかくまつてゐることが知れて時平公の方からその首を打つて渡せとの嚴命が下り松王丸が首實檢に推參した
菅秀才
菅丞相の一子當年八歳
松王丸
時平公の舍人今日の首實檢の使

六　寺子屋

竹田出雲

武部源藏白臺に首桶のせてしづ〳〵出で、目通りにさし置き、「是非に及ばず菅秀才の御首討ち奉る。いはば大事ない御首、性根をすゑ、さあ松王丸、しつかりと檢分せよ」と忍びの鐔元くつろげて、虛といはば切りつけん、實といはば助けんと、固唾を呑んで控へ居る。「はゝはゝ、何のこれしきに性根どころか、今淨玻璃の鏡にかけ、鐵札か金札か、地獄・極樂の境、家來衆、源藏夫婦を取卷きめされ」。「畏まつた」と捕手の人數、十手振つて立ちかゝる。女房戸浪も身を固め、夫はもとより一生懸命「さあ、實檢せよ、檢分」といふ一言も命がけ、後は捕手、向ふは曲者、玄蕃は始終目を配り、こゝぞ絕體絕命と思ふうち、早首桶引寄せ、蓋引きあけた首は小太郎、贋と言うたら一討と、はや拔きかゝる。戸浪は祈願「天道樣・佛神樣、

源藏夫婦　源藏とその妻戸浪
玄蕃　時平公の家人春藤玄蕃
菅秀才の首請取の使
小太郎　先刻この寺子屋へ寺入りした小兒
實は松王丸の子
時平公　藤原時平

憐み給へ。」と女の念力。眼力光らす松王が、ためつすがめつ窺ひ見て、「むう、こりや菅秀才が首討つたは紛ひなし、相違なし。」といふにもびつくり源藏夫婦、あたりきよろ〳〵見合はせたり。檢使の玄蕃は檢分の詞證據に、「出かした〳〵、よく討つた、褒美にはかくまうた科赦してくれる。いざ、松王丸、片時も早く時平公へお目にかけん。」「いかさま、隙取つてはお咎めもいかゞ。拙者はこれよりお暇たまはり、病氣保養致したし。」「おゝ、役目は濟んだ、勝手にせよ。」と首請取り、玄蕃は館へ、松王は駕に搖られて立歸る。夫婦は門の戸びつしやりしめ、物も得いはず、青息吐息、五色の息を一時にほつと吹出すばかりなり。胸撫でおろし源藏は、天を拜し地を拜し、「あゝ、有難や、忝なや、凡人ならぬ我が君の御威德の顯れて、松王めが眼がかすみ、若君と見定めて歸つたは、天成不思

菅丞相　右大臣菅原道眞
時平公の讒により筑紫へ流謫の身となつた

議のなすところ、御壽命は萬々年、悅べ女房。」「いやもう〳〵大抵の事ぢやござんせぬ。あの松王めが眼の玉へ菅丞相樣がはいつてござつたか、但し首が黃金佛ではなかつたか。似たといつても瓦と金、寶の花の御運開きと、餘り嬉しうて涙がこぼれる。」「はあゝ有難や尊や。」と悅び勇む折からに、小太郎が母いきせきと迎へと見えて門の戸叩き、「寺入の子の母でござんす、今やう〳〵歸りました。」といふ聲聞くより又びつくり、一つ遁れて又一つ、「こりやまあ何と、どうせう。」と、妻が騷げど夫は胴する、「こりや、最前言うたはこゝの事、若君には代へられぬ、狼狽者。」と戸浪を引退け、門の戸ぐわらりと引明くれば、女は會釋し、「これはまあ〳〵お師匠樣でござりますか、わるさをお賴み申します。何處に居やるぞ、お邪魔であろに。」といふを幸ひ、「いや奥に子供と遊んで居ます、連

梅は飛び
梅王が筑紫へ下つたとき菅丞相が詠まれた歌といふ

立つて歸られよ」と眞顏で言へば「おゝ、それなら連れて歸りましよ」とすつと通るを、後より只一討と切りつくる。女もしれものひつぱづし、逃げても逃がさぬ源藏が双するどに切りつくるを、我が子の文庫ではつしと受止め「これ待つた、待たんせ、こりやどうぢや」と反ぬる刄も用捨なく、又切りつくる文庫は二つ、中よりばらりと經帷子、南無阿彌陀佛の六字の幡、顯れ出でしはこはいかにと、不思議の思に劍も鈍り、進みかねてぞ見えにける。

小太郎が母涙ながら「若君菅秀才のお身代り、お役に立てて下さつたか、まだか。樣子が聞きたい」といふにびつくり。「して〳〵それは得心か」「得心なれやこそこの經帷子、六字の幡」「むう、してその許は何人の御内證」と尋ぬる内に、門口より「梅は飛び、櫻は枯るゝ世の中に、何とて松のつれなかるらん。女房悅べ。悴は

夫婦か
松王と小太郎の母とが夫婦であつたか

兄弟三人
松王
梅王
櫻丸

お役に立つたぞ」と、聞くよりわつとせき上げて、前後不覺に取亂す。「やあ未練者め」と叱りつけ、ずつと通るは松王丸。

見るに夫婦は二度びつくり。夢か現か夫婦かと呆れて詞もなかりしが、武部源藏威儀を正し「一禮は先づあとのこと。これまで敵と思ひし松王、打つて替つた所存はいかに。不審しさよ」と尋ぬれば、おゝ御不審尤。存じの通、我々兄弟三人は、めい〳〵に別れて奉公。情なやこの松王は時平公に隨ひ、親兄弟とも肉緣切り、御恩請けた丞相樣へ敵對。主命とはいひながら、皆これこの身の因果、何卒主從の緣切らんと、作病構へ、暇の願。菅秀才の首見たらば、暇やらんと、今日の役目。よもや貴殿が討ちはせまい。なれども、身代りに立つべき一子なくば、いかゞせん。こゝぞ御恩を報ずる時と、女房千代と言合はせ、二人の中の悴をば、先

へ廻してこの身代り。机の數を改めしも、我が子は來たかと心の著。菅丞相には我が性根を見込み給ひ、何とて松はつれなからうぞとの御歌を、松はつれない、つれない、と世上の口にかゝる悔しさ。推量あれ、源藏殿。

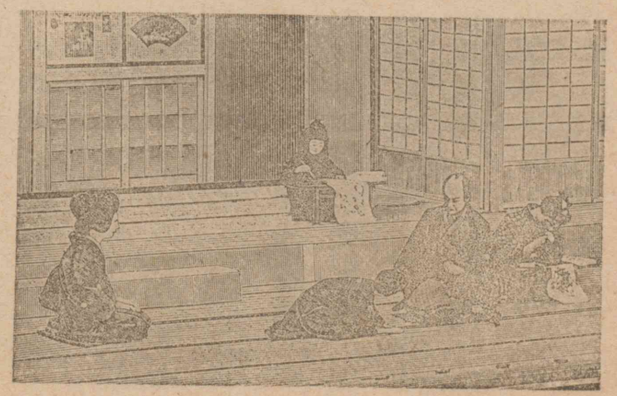
著　易占の具　著萩の莖又は竹を用ひる筮竹

小太郎　松王の長子

竹田出雲　讀史餘錄

悴がなくばいつまでも、人でなしといはれんに、持つべき者は子なるぞや」といふに、女房猶せき上げ、草葉の陰で小太郎が、聞いて嬉しう思ひましよ。持つべき者は子なるとは、あの子が爲によい手向。思へば最前別れた時、いつにない跡追うたを、叱つた時のその悲しさ。冥途の旅へ寺入と、早、蟲が知らせたか。隣村へ行くというて、途までいんで見たれども、子を殺さしにおこして置いて、どうまあ內へいなるゝものぞ。死顏なりとも、今一度見たさに、未練と笑うて下さんすな。包みし祝儀は、あの子が香奠。四十九日の蒸物まで、持つて寺入さすといふ悲しいことが世に有らうか。育ちも生れも賤しくば、殺す心もあるまいに、死ぬる子はみめよしと、美しう生れたが、かはいやその身の不仕合。何の因果に疱瘡まで、しまうたことぢや」とせき上げて、かつぱと伏して泣きければ、共に悲しむ戸浪は立寄り、最前にな、連合の身代りと思ひついた傍へいて、「お師匠樣、今から賴み上げます。」というた時の事思ひ出せば、他人のわしさへ骨身が碎ける。親御の身ではお道理」と、涙添ふれば、「いやこれ御內證。これや女房も何でほえる。覺悟した御身代り、內で存分ほえたでないか。

御夫婦の手前もある。いや何、源藏殿。申し付けてはおこしたれども、定めて最期の節、未練な死を致したでござらう。「いや若君菅秀才の御身代りと言聞かしたれば、潔う首指しのべ」。「あの逃隱れも致さずにな」。「につこりと笑うて」。「む、む、む、出かし居りました。利口な奴、立派な奴、健氣なやつや九つで、親に代つて恩送り、お役に立つたは孝行者、手柄者と思ふから、思ひ出すは櫻丸、御恩も送らず先立ちし、さぞや草葉の陰よりも羨ましからう、けなりからう、悴が事を思ふにつけ、思



寺子屋（劇）

ひ出さるゝ、出さるゝ」と流石同腹同性を忘れかねたる悲歎の涙。「のう、その叔父御に小太郎が逢ひますはいの」と取付いて、わつとばかりに泣沈む。

歎も漏れて菅秀才、一間の内より立出で給ひ、「我に代ると知るならば、この悲しみはさすまいに、かはいの者や」と御袖を絞り給へば、夫婦ははつと共にひたする有難涙。「序ながら若君樣へ御土產」と松王つつ立ち、「申し付けた用意の乘物、早く〳〵」と呼ばはるにぞ、「はつ」と答へて家來ども御目通に舁据うる。「早御出」と戸を開けば、菅丞相の御臺所。「のう母樣か」。「我が子か」と御親子不思議の御對面。源藏夫婦横手を打ち、「方々の御行方尋ねしに、何處にか御座なされし」。「されば〳〵、北嵯峨の御隱家、時平の家來が聞出し、召捕に向ふと聞き、某山伏の姿となり、危い處を奪ひ取つ

北嵯峨　今の京都市右京區嵯峨町の内

河内の國　河内國（大阪府）南河内郡土師村
菅丞相の伯母覺壽の居村
菅丞相の姫君刈屋姫もそこに隱れて居る
六道　地獄　餓鬼　畜生　修羅　人間　天上
能化　師となつて他を教化するもの「所化」の對「六道能化」の菩薩とは地藏菩薩をさす
賽の河原　冥途の三途の川のほとり小兒が小石で塔を積むと大鬼が來ては崩してしまふそれを地藏菩薩が現れて救ふといふ
劍　冥途にあるといふ劍の山
死出の山　冥途の閻魔王國の境にあるといふ山

たり。急ぎ河内の國へ御供なされ、姫君にも御對面。これやこれや、女房、小太郎が死骸、あの乘物へ移し入れ、野邊の送り營まん」。「あい」と返事のその中に、戸浪が心得、抱いてくる死骸を網代の乘物へ乘せて、夫婦が上着を取れば、あはれや內より覺悟の用意、下に白無垢麻社衣。

心を察して源藏夫婦、野邊の送りに親の身で、子を送る法はなし。我々夫婦が代らん」と立寄れば、松王丸「いや〳〵これは我が子にあらず。菅秀才の亡骸を御供申す。いづれもは、門火門火」と、門火を賴み、賴まるゝ、御臺若君諸共に、しやくり上げたる御涙。冥途の旅へ寺入の師匠は彌陀佛、釋迦牟尼佛、六道能化の弟子になり、賽の河原で砂手本、いろは書く子のあへなくも、ちりぬる命是非もなや。あすの夜たれか添乳せん。らむうい目見る親心、劍と死出の山けふこえ、あさき夢見し心地して、跡は門火にゑひもせず、京は故鄕と立別れ、鳥邊野さして連れかへる。（菅原傳授手習鑑）

七　平安朝時代の文學

平安奠都より鎌倉開府に至るまで四百年間は、實に泰平無事の時代なりき。時に邊境の騷亂を見たれども、中央は常に遊樂を事とし、殊に政局に立てる藤原氏は、武事を顧みずして文事を偏重し、國務を後にして詩歌管絃に耽れり。しかも上下文野の懸隔甚だしく、庶民は何等上流社會と交渉する所あらざりしかば、その間に生れたる文學は、庶民と沒交渉なる貴族文學なりき。その背景を成せるものは儒佛二教の文化にして、かの唐朝に學べる漢詩文は當初和歌をも壓倒する概ありき。佛教は夙くよ

り我が思想界に影響するところありしが、當代には新に天台・眞言二宗を傳へて、その教化の及ぶところ更に大なるものあり。歌集に釋教の部を立て、神社の建築に佛閣の風を加味したる如きを見ても、その一斑を察知すべし。されど所謂平安佛教の隆盛は、單に形式の上に存して、未だ深く信仰に根ざすに至らず、纔かに三世因果の說に厭世の念を抱かしめたれども、固より以て我が國固有の樂天思想を動かすに足らざりき。要するに平安朝時代は文字通り平安の時代にして、儒佛の教義も倫理的、宗教的には猶深く國民を動かすに至らざりしを以て、彼等は感情を主として、之が中庸を得んことを理想とし、隨つてその目指す所は必ずしも善に非ずして美にありしなり。かくて所謂「物のあはれ」の世界を展開せる所、當代文學の特色たり。加之、假名文字の發達はその表現を自由にして優麗なる文體たらしめ、形式・內容相調和して情趣ある文學を成せり。その形態は刹那的抒情より客觀的敍事に移り、その思潮は傳奇的・浪漫的より寫實的となり、次第に頽廢的に傾き行けり。

一　漢詩文・和歌・謠物

當代初期に於ては、和歌は寧ろ衰へて漢詩文の隆盛を來し、奈良朝に出でたる懷風藻の後を承けて、凌雲集・文華秀麗集・經國集の如き詩文集相次いで撰ばれたり。詩に於ては嵯峨天皇最も秀で給ひ、僧空海・小野篁共に詩才高く、やゝ降りて都良香・菅原道眞等亦名あり、更に後には藤原公任聞えたり。なほ末期に至りて藤原明衡本朝文粹を撰し、嵯峨天皇以下十五代二百年間の詩文を類聚したれば、就いて當代の作品と作家とを見るべし。

既にして當初隆盛を見たりし詩文の衰ふるに及び、これに代りて勃興し來れるは和歌なり。古今和歌集は實に當代歌界の大勢を代表せるもの、延喜五年醍醐天皇の勅を奉じて紀貫之・凡河内躬恆等これを撰す。萬葉集と異なり、短歌を中心とし、題材の分類も一歩を進めて、爾後歌集の標準となれり。歌風は上代の素樸を脱して技巧の加はるあり、五七調は七五調に變り、連體・已然の活用形に句を止め、以て内容たる情緒を理智的に曲折せしめ、刹那の感動を時間的に連續せしめんとせる例多し。

小野篁

撰者の外、殊に名ある作家は在原業平・僧正遍昭・小野小町・文屋康秀・大伴黒主・喜撰法師等なり。貫之は詠歌よりも寧ろ散文に於てその長を見る。古今集を勅撰和歌集の第一として、次々に撰集行はれ、鎌倉時代の新古今集に至るまで八つを數ふ。これを八代集と稱す。新古今の事は姑く措き、八代集中金葉詞花・千載の三集殊に名あり。歌人としては曾根好忠・和泉式部・西行法師を推すべく、それ〴〵家集ありて愛誦せらる。

八代集
古今
後撰
拾遺
後拾遺
金葉
詞花
千載
新古今
それ〴〵の家集
曾根好忠の曾丹集
和泉式部の和泉式部集
西行法師の山家集

元來和歌は口に謠ひたるものなれども、平安朝に入りては既に謠はれずなりて、別に謠物として神樂歌・催馬樂など現れたり。この種のものも夙く奈良朝に成立したれども、現存せるは當代の修正にかゝるものなりといふ。神樂歌は神前に奏せらるゝもの。催馬樂は一種の俗謠にして、當時の民衆の聲として聞くとき面白し。更に後れて朗詠あり。その内容は既成詩文の佳

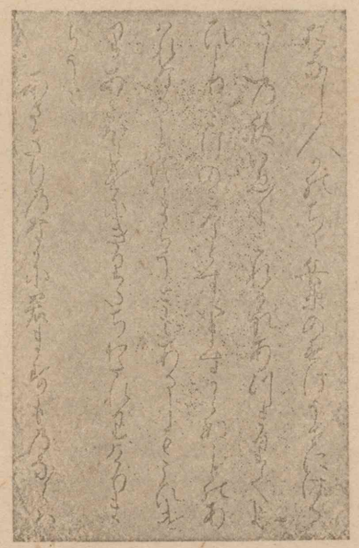
句にして、これに曲節を附して謠ひしものなり。藤原公任に和漢朗詠集、藤原基俊に新撰朗詠集の撰ありて、これらには當時の和歌をも添へたり。今樣・和讃の類も亦謠物にして、その文獻として重んずべき梁塵祕抄は、後白河天皇の御撰なり。

二　歌物語・傳奇的物語

更に當代の特殊現象として、和歌を說話の中心とする物語の成立を見たり。伊勢物語・大和物語これなり。前者は段毎に「昔男ありけり」と起筆して、各〻獨立せる小篇の如くなれども、實は在原業平の歌に興味多き詞書を加へて略〻これを統一したるに過ぎず。作者は明らかならず。ともあれ、その主人公の抒情的生活の種々相を眺め得る所に興味多し。後者は前者の形態を蹈襲したれども、一箇の主人公を立てず、文章も熱と力とを缺く。唯

歌を含める多くの傳說を集めたるを以て、古來歌人の愛誦する所となれり。以上二者は何れも歌物語と稱せらる。

これに對して傳奇的物語と呼ばるゝものに竹取物語・宇津保物語・落窪物語あり。竹取物語は伊勢物語と共に當代物語と稱するものの先驅たり。されども作者及び成立年代に就いては確說なし。全篇傳奇的傾向著しく、佛說乃至支那神仙思想をも加味せるが如く、歌物語とは別種の敍事的色彩を有し、文章簡古なり。宇津保物語は竹取に比して說話の規模大きく、描寫現實的傾向に進みた



藤原爲家筆大和物語
侯爵前田利爲藏

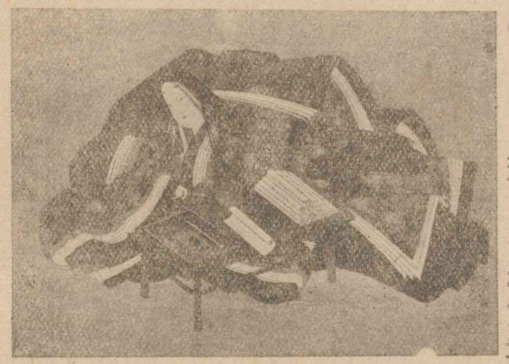
筆蹟
おなし人かのちち兵衛のすけうせにけるとしの秋い五にこれかれあつまりてよひよりさけのみなとすいますからぬことのあはれなることをまらうともあるしもこひけりあさほらけにきりたちわたれりけりまらうと
あさきりのなかに君ますものならは

れども、猶人物の性格を描くに至らず、敍事に神祕的の趣少からず。落窪物語は所謂繼子いぢめを題材とせるもの、宇津保よりは短篇なれども、變化あり、波瀾あり、且統一ありて、物語としての脚色優れたり。

三　小說物語・歷史物語・傳說物語

以上の物語を先驅として、愈當代の代表的小說源氏物語は現れたるなり。作者を紫式部とす。全篇五十四帖。前の大半は主人公光源氏の得意なる生活を描き、後の宇治十帖は主人公薫大將の失意なる半生を寫す。前後の脚色渾然として、幾多人物の性格も明瞭に發揮せられ、局面の展開亦頗る變化に富めり。蓋しこの物語の傑作たる所以は、その筆端深く人生の內面描寫に進み、詳に人間心理の變化を捉へ、加ふるに自然の情趣の精細な

る觀察を以てし、善く敍事と敍景との融合調和の美を成したるにあり。若しそれ文章に至つては、純國語として最も發達せるものにして、文法的に、修辭的に、あらゆる形式と辭樣とを驅使せりと謂ふべし。故に古今集が和歌の典型となれるが如く、源氏物語は國文として永く後世の模範となれり。狹衣物語は小說物語として源氏物語の傾向を襲へるもの、心理の描寫よりは說話の複雜を以て一篇の興を釀さんとせり。これと同時に濱松中納言物語出づ。背景を支那に取り、構想に變化を求む。狹衣の記述的なるに對して、これ



紫式部　土佐光起筆

には感傷的なる筆致を見る。尚、この種の物語は、末期に至りて更に二三を數ふべしと雖も、その趣向荒誕に走りて、漸次に頽廢的に傾き、特に言ふに足るものなし。

然るに、是等と別箇の形象を取れるものあり。歴史物語として榮華物語及び大鏡、説話物語として今昔物語これなり。榮華物語は世繼ともいひ、藤原道長の榮華を極めたる一生を主として描かんとせるもの、作者に就いては確説なし。全篇四十帖を編年體に仕立て、各帖に優美なる名目を附したれども、文學的價値はさして高からず。唯事實の精敍に當代貴族の生活を髣髴たらしむ。大鏡は榮華と同じく道長の生涯を錄するを眼目としたれども、その體裁を帝紀と列傳とに分ちたる所彼と異なり。雲林院の菩提講に邂逅せる老翁等が相語らふ趣向とす。その

雲林院　今の京都市紫野大徳寺の南雲林院にあつた寺

事を敍するや、善く核心を捉へてこれを印象的に記し、且、記載的より寧ろ批判的にして、その文章の簡潔遒勁なる、遙かに榮華に優れり。作者を藤原爲業とする者あれども詳ならず。今昔物語は當代初期の日本靈異記の系統を引ける説話文學と稱せらる。各章「今は昔」と筆を起して天竺・震旦・本朝の説話を三十一卷に類聚す。佛教傳説多數を占めたれど、本朝の部には世俗・合戰・宿報・惡業その他、素樸なる雜説を輯め、平安貴族の生活の外、更に民衆の生活に觸れたる所あり。これこの種の物語が、新に文學研究の對象として注意せらるゝに至りし所以なり。

四　隨筆・日記

紫式部の小説源氏物語と相並びて、當代文學の雙璧と稱せらるるは實に清少納言の隨筆枕草子なり。著者は感性鋭敏にして、

自我の念強きその個性をこゝに遺憾なく發揮し、且その環境を極めて自由に描出せり。その捉へ來る題材の多種多方面なる、或は敍し或は記し、或は說き或は評し去るその行文の變化錯綜せる、殆ど應接に遑なからしむ。蓋し枕草子の隨筆としての妙趣はこゝに存す。然れどもその觀察は、事物の特色を捕へながらも畢竟感覺的にして、未だ必ずしもその神髓に徹し得ざる憾ありとせらる。かくの如く自我の外面的優越の感に止りて、深く內面的なるものに入る能はざりし所、この作者も亦當代の一女性たりしことを思はしむ。

日記と稱する文獻の中、譯文のものは姑く問はず、國文を以て記されたるものに夙く紀貫之の土佐日記あり、假名文日記の嚆矢と稱せらる。貫之は古今集の序以外にも國文の作ありて、その

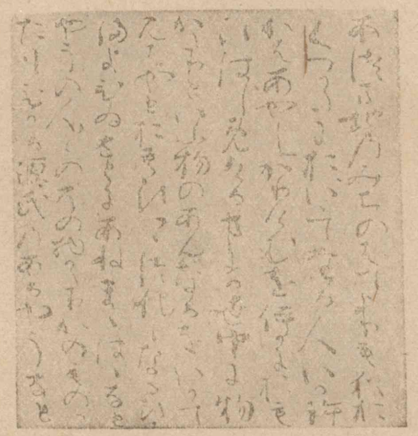
筆蹟

あつまちのみちのはてよりも猶おくつかたにおいたる人いかゝ許かはあやしかりけむをいかにおもひはしめける事にか世中に物かたりといふ物のあんなるをいかてはやとおもひつゝつれつれなるひるまよひなとにあねまゝはゝなとやうの人々のそのものかたりかのものかたりひかる源氏のあるやうなと

道綱

藤原氏
關白兼家の子
道長の兄

國文發達史上の功沒すべからず。由來當代の日記・隨筆は、一方に興隆せる物語文學との關係甚だ密にして、物語の主人公を第一人稱として記したるが如き觀あり。かくて成れる初期の作が土佐日記・蜻蛉日記なり。土佐日記は著者が土佐守の任滿ちて歸洛する海路の日記にして、簡古輕妙の筆致、偶、その亡兒に對する悲痛の心情をも蔽ひ去らんとする趣あり。蜻蛉日記は右大將道綱の母の著す所。



藤原定家筆　更級日記
帝室御物

當時の家庭に於ける一女性の心境を寫して眞率の氣溢る。なほ枕草子と殆ど同時に作られたる日記に、紫式部日記・和泉式部

御堂關白
關白太政大臣藤原道長
藤原兼家の末子
萬壽四年（一六七）卒
年六十二

四條大納言
藤原公任
關白頼忠の子
詩歌音樂の達人
和漢朗詠集の撰者
長久二年（一〇四一）卒
年七十七

大入道
藤原兼家
頼忠の從弟
關白太政大臣
正暦元年（一六〇）卒
年六十二

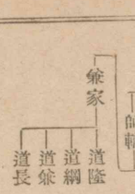
中關白殿
關白藤原道隆
兼家の長子
長德元年（一六五五）卒
年四十九

日記あり。これらにやゝ後れて菅原孝標の女の更級日記あり。何れも自己の經驗を敍し、環境を語り、その間に作者の個性と精神生活とを反映せしむ。近來の謂はゆる自照文學とは、この種の日記文學を指せるなり。

八　御堂關白の幼時

四條大納言の、かく何事もすぐれてめでたくおはしますを、大入道殿「いかでかゝらむ。羨ましくもあるかな。わが子どもの、影だに踏むべくもあらぬこそ口惜しけれ」と申させたまひければ、中關白殿・粟田殿などは、げにさもとやおぼすらむと、恥づかしげなる御氣色にて、ものもたまはぬに、この入道殿は、いと若うおはします御身にて「影をば踏まで、面をやは踏まぬ」とこそ仰せら

粟田殿
關白藤原道兼
兼家の第三子
正暦五年（一六四）卒
年三十五



豐樂院
八省院の西
儀式宴會などを行ひ給ふ處

仁壽殿
紫宸殿の北
内宴相撲蹴鞠などを行ひ給ふ處

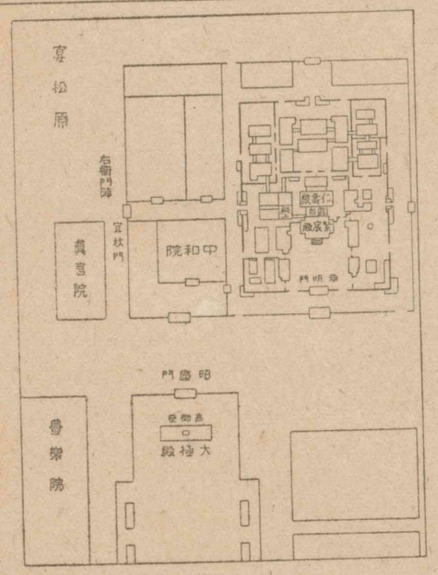
大極殿
八省院の中央にある正殿
朝政を視給ひ且大禮を行ひ給ふ處

れけれ。

さるべき人は、疾うより御心魂の猛く、御守もこはきなめりと覺え侍るは。花山院の御時に、五月下つ闇に五月雨も過ぎて、いとおどろ〳〵しくかきみだれ雨の降る夜、帝さう〳〵しくや思し召しけむ、殿上に出でさせおはしましして、遊びおはしましけるに、人々御物語などし給ひて、昔恐しかりけることどもなどに申しなり給へるに、「今宵こそいとむづかしげなる夜なめれ。かく人がちなるだに、けしき覺ゆ。まして物離れたる處などいかならむ。さあらむ處に一人往なむや」と仰せられけるに、「え罷らじ」とのみ申し給ひけるを、入道殿は「いづくなりとも罷りなむ」と申し給ひければ、さる所おはします帝にて、「いと興あることなり。さらば往け。道隆は豐樂院、道兼は仁壽殿の塗籠、道長は大極殿へ

昭慶門　大極殿の北の門
右衛門の陣　宜秋門の内
承明門　紫宸殿の南の門
宴の松原　豐樂院の北方の空地

往け」と仰せられければ、よその君たちは、便なき事をも奏してけるかなと思ふ。又承らせ給へる殿ばらは御氣色變りて、益なしと思しけるに、入道殿はつゆさる御氣色もなくて、「私の從者をば具し候はじ。この陣の吉上まれ、瀧口まれ、一人昭慶門まで送れと仰言たべ。それより内には、一人入り侍らむ」と申し給へば、「證なきこと」と仰せらるれば、「げに」とて、御手箱におかせ給へる小刀申して立ち給ひぬ。今二所もにがむ〳〵各おはしましぬ。子四つと奏して、かく仰せられ、議するほどに、丑にもなりにけむ。「道隆は右衛門の陣より出でよ。道長は承明門より出でよ」と、それをさへわかたせ給へば、しかおはしましあへるに、中關白殿陣まで念じておはしたるに、宴の松原のほどに、そのものともなき聲どもの聞ゆるに、すぢなくて歸り給ふ。粟田殿は露臺の外まで わ な な く 〳〵 おはしたるに、仁壽殿の東面の砌のほどに、簷とひとしき人のあるやうに見え給ひければ、ものも覺えで、「身の候はばこそ仰言も承らめ」とて、各立歸り參り給へれば、御扇を叩きて笑はせ給ふに、入道殿はいと久しう見えさせたまはぬを、いかゞと思し召すほどにぞ、いとさりげなく、事にもあらずげにて參らせ給へる。「いかに〳〵」と問はせ給へば、いとのどやかに御刀に削られたるものを取具して奉らせ給ふに、「こは何ぞ」と仰せらるれば、「たゞにて歸り參りてはべらむは證さぶらふま



内裏の圖

高御座　大極殿の中央に安置せられてある御座

御堂　法成寺もと京極土御門にあつた京都市上京區仙洞御所の附近

じきによりて、高御座の南表の柱のもとを削り候なり」とつれなく申し給ふに、いとあさましう思し召さる。こと殿たちの御氣色は今にも直らで、この殿のかくて參り給へるを、帝より始め感じのゝしられ給へど、羨ましきにや、又いかなるにか、物もいはでぞ候ひ給ひける。なほ疑はしく思し召されければ、「つとめて、藏人して、削り屑をつかはして見よ」と仰言ありければ、もて行きて、おしつけて見たうびけるに、つゆ違はざりけり。その削りあとはいとけざやかにて侍るめり。末の世にも、見る人はなほあさましきことにぞ申ししかし。（大鏡）

九　法成寺の造營

今は御心地例ざまになりはてさせ給ひぬれば、御堂の事を思し

攝政殿　藤原頼通　道長の長子世に宇治關白といふ　承保元年（一〇七四）卒　年八十三　殿の御前　道長

急がせ給ふ。攝政殿、國々まで、さるべき公事をばさるものにて、まづこの御堂の事を先につかうまつるべき仰言のたまふ。殿の御前も、「この度生きたるは別事ならず、この願の叶ふべきなめり」と宣はせて、他事なく、たゞ御堂におはします。方四町をこめて大垣にして、瓦葺きたり。樣々に思し、おきて、急がせ給へば、夜の明くるも心許なく、日の暮るゝも口惜しう思されて、夜もすがらは、山を疊むべきやう、池を掘るべきさま、木を栽ゑなめさせ、さるべき御堂々々、方々樣々造りつゞけ、御佛はなべてのさまにやはおはします。丈六の金色の佛を、數も知らず作りなめ、そなたをば北南と馬道をあけて、道を整へ造らせ給ひて、廊渡殿數多く作らせ給ふ。雞の鳴くも久しく思され、宵曉の御行も怠らず、安きいも大殿ごもらず、唯この御堂の事のみ、深く御心にしませ給

御封　御封戸の略　皇族・大官などに賜はつた民戸

へり。

日々に多くの人々參り罷で立ちこむ。さるべき殿ばらを始め奉りて、宮々の御封・御莊どもより、一日に五六百人・千人の夫どもを奉るにも、人の數多かることをば、かしこきことに思したち、國國の守ども、地子・官物はおそなはれども、只今は、この御堂の夫役・材木・檜皮・瓦など多く參らすることを、我も〳〵ときほひつかうまつる。大方近きも遠きも參りこみて、品々方々、あたり〳〵につかうまつる。

或處を見れば、御佛つかうまつるとて、佛師ども百人ばかり並みゐてつかうまつる。同じくはこれこそめでたけれと見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、工匠ども二三百人のぼりゐて、大きなる木どもには太き綱をつけて、聲を合はせてえさまさと引上げさわぐ。御堂の內を見れば、佛の御座作りかゞやかす。板敷を見れば、木賊・椋の葉などして、四五十人手毎に並みゐて磨きのごふ。檜皮葺・壁塗・瓦作なども數をつくしたり。又年老いたる翁などの、三尺ばかりの石を、心に任せて切りとゝのふるものあり。池を掘るとて四五百人おりたち、山を疊むとて五六百人のぼりたち、又大路の方を見れば、力車にえもいはぬ大木どもに綱をつけて、叫

法成寺の造營
中澤弘光畫

須達長者
祇園精舎を建てて佛に供養した天竺の舍衛國の豪商

祇園精舎
釋迦が度々說法をした中印度の寺

びのゝしりて引きもてのぼる。鴨川の方を見れば、筏といふものに樽・材木を入れて、棹さして心地よげに歌ひのゝしりて上るめり。磐石といふばかりの石を、はかなき筏にのせて率て來れど、沈まず。すべて色々樣々いひつくし、まねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舍作りけむも、かくやありけむと見ゆるを、冬の室、夏の風、各〻ことく〳〵なり。

かゝる御勢にそへて、入道せさせ給ひて後は、いとゞまさらせ給へりと見えさせ給ふにも、猶なべてならざりける御有樣かなと、近う見奉る人は尊み、遠う見奉る人は遙かに拜み參らす。今はこの御堂のあたりの木草ともならむと思へる人のみ多かり。そなたざまに赴けば、海の浪もやはらかにたちて、この御堂のものを持て運ばせ、河も水澄みて、快く浮べもて參ると見ゆ。なほ

長谷寺
奈良縣磯城郡初瀨町にある新義眞言宗豐山派の大本山
養老五年（一三八一）僧道明開創

天王寺
大阪市天王寺區にある四天王寺天台宗の名刹
聖德太子御創建

藤村作
國文學者
文學博士
東京帝國大學名譽教授
明治八年（一五三五）佐賀縣生

なべて、この世の事とは見えさせ給はず。まづは、先年に長谷寺にある僧の、御祈禱をいみじうして寐たりける夢に、大きにいかめしき男の出で來て、「何かかく殿の御事をばともかくも申し給ふ。弘法大師の、佛法興隆の爲に生れ給へるなり」とぞ見えさせ給ひける。又天王寺の聖德太子の御日記には、「王城より東に佛法弘めむ人を我と知れ」とこそは書きおかせ給ふなれ。いづれにてもおろかならぬ御事なり。（榮華物語）

一〇　國文學の研究

藤村作

我々日本國民に取つて生命の糧であり力であるものは國文學である。取出しても〳〵盡くることなく、一時代から次の時代へと絶えず我々の內的生活に糧を供してくれる寶庫は、我が二

千年來の國文學である。我々は國文學を知り、國文學に親しむことによつて、常に日本國民たる生命を新にして行くことが出來る、眞の日本國民として反省と自覺との機會を與へられてゐる。我々は生れて日本民族である、日本國民である。何としても他の民族ではあり得ない、又他の國民ではあり得ない。それは偶然に日本といふ國土に生れたが爲ではない。日本民族の血を引き、日本國民の生命を生命として享けてゐるからである。血は爭ふべからざるものである。血によつてなされてゐる國民の結合は無機的な結合ではない。有機的な結合に成れる國家は機械的な國家ではない。爭ふべからざる血は特殊なる民族性を作り、民族精神を作り、この民族性・民族精神が有形に又無形に國家を形成してゐる。日本民族を以て日本國を成してゐる我々日本國民は最も惠まれた國民である。我々は日本民族として生くる外に生くべき道は見出し得ない。而して國家によつて民族共有の生命の實現に努め、民族精神を世界に擴充するを圖ることが、我々の個人として、又國民として生くべき唯一の道である。

國民の文學は國民の精神をさながらに寫した鏡である。かるが故に、英吉利文學は英國民に取つて最も尊い文學である。佛蘭西文學は佛國民に取つて最も大切な文學である。獨逸文學は獨國民に取つて最も愛すべき文學である。我々日本國民に取つては、日本文學の外に、世界の何處にもより以上に尊い、大切な、愛すべき文學はあり得ない。我々は自己の生命を他人のそれに比較してこれを評價するやうな自己に冷酷な所爲はした

くない。我が國民精神の表現である國文學を外國文學に比較はしても、その價値の比較には及びたくない。よしそれが高く評價されようと、廉く評價されようと、國文學は我々日本國民の爲には唯一のものであり、如何ともし難いものである。我々はその本質を究め、益々これを充實せしめ展開せしめることに努めればよい、又それより外になすべき道は持たない。我々は我々に生命の力を與へてくれる二千年來の歌人・物語作者・隨筆日記の筆者・軍記物語の著者から、近世の各種樣式の文藝の作家たちに心からなる尊敬を捧げたい。そしてそれと同時に古典文學の筆寫・蒐集・整理・訓詁・註釋・批評の業に從事して、我々に古典文學に親しみ得べき便宜を與へてくれた國文學者たちにも同樣の敬意を表したい。

文學に國境は無いやうに言ふ人もある。或程度までは承認さるべきことである。しかし一面からいへば、民族的・國民的の血の色の鮮かなものは文學である。國語は國民の內にその職能を全うするばかりでなく、その國語を解するものは外國人でも同樣にその職能を盡くし得る。とはいへ、單語・文章の持つ意味はとにかく、その中に脈打つてゐる全精神を些の遺漏なく理解し得るものは、その國民を措いては決してあり得ない。かるが故に、英吉利文學は英國民をして研究せしめ、佛蘭西文學は佛國民をして研究せしめ、獨逸文學は獨國民をして研究せしむるが最も適當であることに論はないが、民族關係の複雜であり、國際交渉の古來久しく、國語組織の甚だ相似た西洋諸國民の間に於ては、外國人で他國文學を研究することも妨ないかも知れない。

しかし、我々のやうに特殊な民族性を有し、特殊な國家を有し、世界の國際關係から久しく隔絶されて特殊な生活を營んで來た國民の文學、系統を異にした特別な組織をもつてゐる國語に表された文學は、特に國民的の色の鮮かなものであることは言ふまでもない。隨つて我が國文學の研究は獨り我々日本國民のみ成し得べき業ではあるまいか。

我が國民の過去を振返つて見ると、亞細亞大陸地方から支那や印度の先進文化を始めて我が國に輸入したのは甚だ遠い昔のことである。その時代に於ては我が國民はまだ素樸の情態に在つたから、彼の國の文化の燦爛たる光輝に接しては、驚異から羨望、崇拜の心を向けて、熾にこれを輸入し摸倣した。內なるものを省みて、よくこれを育みそだてるに遑なく、彼に學ぶことに

務めた。制度に於て、服飾、家屋に於て、藝術に於て、彼の影響、感化を受けた所は甚だ多かつた。學問、思想、文學に至るまで追隨と摸擬とに力を致してゐた。これが爲に、當時の文化は國民の獨創力の甚だしく缺乏したものとなつてゐた。かくして國家を支配した政治の實權は貴族階級から武士階級へ移りゆき、王朝時代、武家時代と時代はかはりゆいたが、外國崇拜の精神は絶えず續き、拜外の迷夢は依然として國民の間に覺めなかつた。

偶〻江戸時代に至り、德川幕府は外國交通の道を杜絶したけれども、多年彼の感化を受けてゐた國民は相變らず拜外の夢を貪つてゐたが、その時代の精神の中からゆくりなく復古の聲が聞え出した。「古に復れ」といふ聲が天籟の如く國民の耳朶に響いて來た。復古の精神は昔のまゝの社會を再びこの地上に現さう

賀茂眞淵
江戸時代の國學者
國學四大人の一
遠江國（靜岡縣）岡部生
明和六年（一七六九）卒
年七十三
贈從三位

本居宣長
江戸時代の國學者
國學四大人の一
伊勢國（三重縣）松阪生
享和元年（一八〇一）卒
年七十二
贈從三位

とする精神ではない。古代の素樸な精神の中に人間の眞精神を見出し、日本人の眞の相を見出して、それに復らうとする精神である。長い年月の間に知らず識らず人間性の眞から離れて來てゐる生活を自覺的に本來の人間性に引直さうとする精神である。外國・他民族の感化・影響の爲に晦まされた民族特有の精神の發揮に復らうとする精神である。「古に復れ」といふのは、人間本然の性に復れ、民族本然の相に復れといふのである。賀茂眞淵は人間の眞の精神を萬葉集に見出して、萬葉集の研究、萬葉風の和歌を提唱し實行した。本居宣長は日本人の眞の相を古事記に見出して古事記傳の著述にその生涯の大部分を捧げたのである。

これら先覺の提唱や實行によつて拜外の迷夢は一部破れかけたのであつたが、江戸末期に至つて、外國の要求に迫られて已むを得ず、當局は鎖國の制を撤廢して、こゝに西洋諸國との交通が開かれた。こゝに於て、西洋文化を我が國民の眼から掩うてゐた幕は切つて落されて、我が國民は再び外國文化の光に眩惑されてしまつた。國際的の地位を高め、國力を增進して彼等と世界に對立するには、先づ彼等の所有するものを我に得なければならぬと知つた敏捷な我が國民は、一千餘年前の國民がなしたと同じやうに外國文化の輸入摸倣に努力した。さうして今日に於ては最早その點では多く彼に劣る所なきまでに漕ぎつけたのである。拜外の精神は對象を異にして又熾に動き始めた。かくて夢から夢へと移り來つて、今日なほこの夢を續けてゐる。この夢の中に明治・大正の六十年は過ぎて來た。

世界大戰はいろ〳〵の意味で世界の劃期的大事件であつた。この事件に覺醒され刺戟されて起つた改造の氣運は今や世界に充滿して、各方面の改造が今現にその途上に在ると見ゆるのである。西洋文化の眞相がこの大事件によつて遺憾なく暴露され、これに對する批判の相が冷やかに輝き始めた。そして明らかにその弱點を認識するに至つた。それと共に、これまで多く閑却されてゐた東方文化が世界の注視の的とならうとしてゐる。物質的から精神的へ、分析的から綜合的へと學界の推移し行かうとする傾向が見え出して來た。數年前から西洋學者の東洋研究・日本研究に向ふ傾向はこれを語る事實である。今や世界國際の關係、國民の交渉は實に近く且密である。一隅を叩けば他の隅々へ直に響を傳へる。我が國に於ても時を同じうして、各種改造運動と共に古典復興・國文學研究の風潮が何處からともなく起つて來た。拜外の迷夢は先づ若い人たちの中から覺めかけて來た。老人たちが無自覺に拜外の鈍い空氣の中に逡巡して、舊習・舊慣の保守に腐心してゐるうちに、却つて若い人たちの中に自覺的な活動・思索がいろ〳〵と起りかけてゐる。改造の聲の中に、外國の束縛を脫して、自國民の生命を擴充して行かうとする聲が聞かれる。この強い精神は、老人たちの中でなくて若い人たちの中に聞かれるやうになつた。自國を凝視し、日本國民自身の眞の相を見出さうとしてゐる熱意が確に若い人たちの中に動き始めたものである。この熱意は、少數專門學者の提唱・宣傳に基づく一時的の現象ではあるまい。それは若うして西洋文化の研究に功を積んだ人たちの間に、か

かる氣運の動いてゐる事實に徵しても知ることが出來ると思ふ。この氣運は、これを一言に纏めれば復古精神の勃興である。「古に復れ」「日本國民のその元に復れ」「外國精神の束縛を脫せよ」といふ精神である。荷田春滿や賀茂眞淵が二百年前に唱へ出し、本居宣長や平田篤胤に繼承されて、大いに國民を警醒し、明治維新の大業を成就した根本を培養した精神である。それが今ここに復繰返されてゐるものといへる。江戸時代の復古主義者には世界知識の狹かつた爲に固陋な偏見に捉へられた弊があつた。今日の復古精神にはかくの如きものを含んではならない。復古精神は古い昔の社會や生活をさながらに今日に移さうといふのではない。古代生活や古代文化の中に見出される人間の眞の精神、日本國民の眞の相に復歸しようとする精神であらねばならぬ。因襲の世界から本然の世界へ、いびつの世界から正しき世界へ、虛僞の世界から眞實の世界へ復らうとする精神であらねばならぬ。而してかゝる人間の眞の精神、日本國民の眞の相はこれを古典文學の世界に見出すべく、本然の世界、正しき世界、眞實の世界はこれを國文學の中に見出すべきであるから、復古精神には古典への憧憬、國文學探究の精神の伴なふを常とするのである。（日本文學講座）

紀貫之
平安朝時代の歌人・散文作家
古今集撰者の一人
天慶九年（一〇〇六）卒
年六十五
贈從二位
それの年
朱雀天皇の承平四年（一九四）

一一　土佐日記鈔

紀　貫之

出立ち

男もすなる日記といふものを、女もして見むとてするなり。それの年、十二月の二十日あまり一日の日の戌の時に門出す。

解由　在任中の會計に相違ないことの證明書

住む館　國守の館　土佐の國府は長岡郡にあつた

その由いさゝか物に書きつく。

土佐の出立ち　佐藤翁湖筆

或人、縣の四年・五年果てて、例の事ども皆しをへて、解由など取りて、住む館より出でて、船に乘るべき處へわたる。かれこれ知る知らぬ送りす。年頃見え具しつる人々なむ別れ難く思ひて、しきりにとかくしつゝのしるうちに夜更けぬ。

二十二日、和泉國までと平かに願ひ立つ。藤原言實、船路なれど、うまのはなむけす。上・中・下醉ひあきていとあやしく、潮海のほとりにてあざれあへり。

九日　朱雀天皇の承平五年（一九五）正月九日

大湊　今の高知縣長岡郡にあつた

那波　今の高知縣安藝郡奈半利川の川口

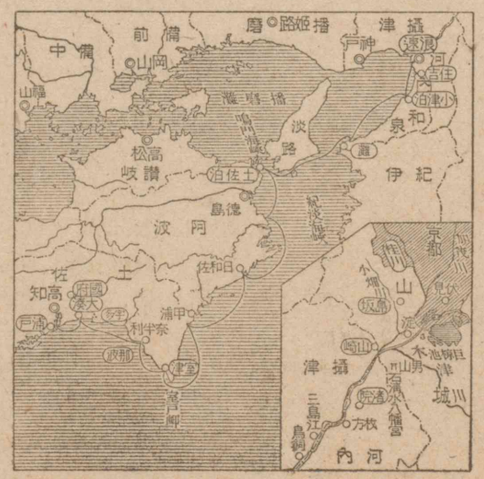
二十三日、八木康敎といふ人あり。この人、國に必ずしもいひつかふものにもあらず。これぞ正しきやうにて馬のはなむけしたる。守がらにやあらむ、國人の心の常として、今はとて見えずなるを、心あるものは恥ぢずになむ來ける。これは物によりてほむるにしもあらず。

二十四日、講師馬のはなむけしに出でませり。ありとある上・下、童まで醉ひしれて、一文字をだに知らぬものしが、足は十文字にふみてぞ遊ぶ。

海の上

九日のつとめて、大湊より那波のとまりを追はむとて漕出でけ

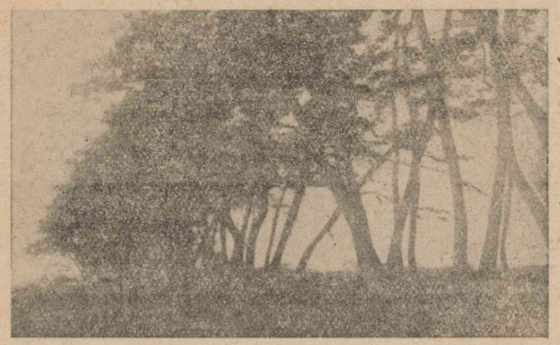
り。これかれたがひに「國のさかひのうちは」とて、見送に來る人あまたが中に、藤原言實・橘季衡・長谷部行政等なむ、御館より出で給ひし日より、こゝかしこに追ひくる。この人々の深き志は、この海にも劣らざるべし。これより、今は漕ぎはなれてゆく。これを見送らむとてぞ、この人どもは追來ける。かくて漕ぎゆくまに〳〵、海のほとりに留れる人も遠くなりぬ、船の人も見えずなりぬ。岸にも言ふことあるべし、舟にも思ふことあれど、かひなし。かゝれば、この歌をひとりごとにしてやみぬ。



土佐より京への船路

宇多の松原

おもひやることゝろは海をわたれどもふみしなければ知らずやあるらむ。



宇多の松原

かくて宇多の松原をゆき過ぐ。その松の數、いくそばく、幾千年經たりと知らず。もとごとに浪うちよせ、枝ごとに鶴ぞとびかふ。おもしろしと見るに、堪へずして、舟人のよめる歌、

見わたせば松のうれごとにすむつるは千代のどちとぞおもふべらなる

とや。この歌はところを見るにえまさらず。

宇多今の高知縣香美郡岸本村宇田

安倍仲麿
靈龜二年（一七六）唐に留學し後唐朝に仕へ寶龜二年（一四三）彼の地に卒した年七十一

かくあるを見つゝ漕ぎゆくまに〳〵、山も海も皆暮れ、夜ふけて西東も見えずして、天氣の事機取の心に任せつ。男も習はぬはいとも心細し。まして女は船底に頭をつきあてて、音をのみぞ泣く。かく思へば、舟子・機取は船歌うたひて、何とも思へらず。二十日、昨日の樣なれば船出さず。皆人々憂へ歎く。苦しく心許なければ、たゞ、日の經ぬる數を、けふいくか、二十日・三十日と數ふれば、およびも損はれぬべし。いとわびし。いもねず。二十日の月出でにけり。山のはもなくて、海の中よりぞ出でくる。かうやうなるを見てや、昔、安倍仲麿といひける人は、唐土に渡りて、歸り來る時に、船に乘るべき處にて、かの國人、馬のはなむけし、別れを惜しみて、かしこのからうた作りなどしける。あかずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は海

男文字
漢字

よりぞ出でける。これを見て、仲麿のぬし、「我が國にはかゝる歌をなむ、神代より神もよみたび、今は上・中・下の人も、かやうに別れ惜しみ、喜もあり、悲しみもある時には詠む」とて、よめりける歌、

あをうなばらふりさけみれば春日なるみかさの山に出でし月かも

とぞよめりける。かの國人、聞きしるまじう思ほえたれども、ことの心を、男文字に、さまを書きいだして、こゝの言葉傳へたる人に言ひしらせければ、心をや聽きえたりけむ、いと思の外になむ愛でける。唐土とこの國とは、言異なるものなれど、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。さて今そのかみを思ひやりて、或人のよめる歌、

みやこにて山のはに見し月なれど波より出でて波にこそい

十六日
承平五年(一九五)二月

山崎
今の京都府乙訓郡大山崎村

島坂
同郡向日町の西の長岡の上にある

桂川
大堰川の下流末は淀川に入る

飛鳥川
世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる(古今集、讀人不知)

れ

都入り

十六日、今日の夕つ方、京へのぼる序に見れば、山崎の店なる小櫃の繪も、糧餅の法螺の形もかはらざりけり。「賣る人の心をぞ知らぬ」とぞいふなる。かくて京へ行くに、島坂にて、人あるじしたり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、歸る時ぞ人はとかくありける。これにもかへりごとす。夜になして京には入らむと思へば、急ぎしもせぬ程に、月出でぬ。桂川月の明きにぞわたる。人々のいはく、「この川飛鳥川にあらねば、淵瀬さらに變らざりけり」といひて、ある人のよめる歌、

ひさかたの月に生ひたる桂川そこなるかげもかはらざりけ

り

又或人のいへる、

天雲のはるかなりつるかつらがはそでをひでても渡りぬるかな

又或人のよめる、

かつらがはわが心にもかよはねどおなじ深さにながるべらなり

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜更けて、處々も見えず。京に入立ちてうれし。家にいたりて門に入るに、月明ければ、いとよく有樣見ゆ。聞きしよりもまして、いふかひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて預れるなり。

さるは、便りごとに物も絶えず得させたり。今宵かゝることと、聲高にものも言はせず、いとはつらく見ゆれど、志はせむとす。

さて池めいてくぼまり、水づける處あり。ほとりに松もありき。五年・六年のうちに、千年や過ぎにけむ、片枝はなくなりにけり。今生ひたるぞまじれる。大方皆荒れにたれば、あはれとぞ人々いふ。思ひ出でぬことなく思ひ戀しきがうちに、この家にて生れし女子の、もろともに歸らねば、いかゞは悲しき。舟人も皆子たかりてのゝしる。かゝるうちに、猶悲しきに堪へずして、ひそかに心知れる人といへりける歌、

うまれしもかへらぬものを我が宿に小松のあるを見るがかなしさ

とぞいへる。猶あかずやあらむ、またかくなむ。

八橋　今の愛知縣碧海郡牛橋村八橋　刈谷驛の北四粁

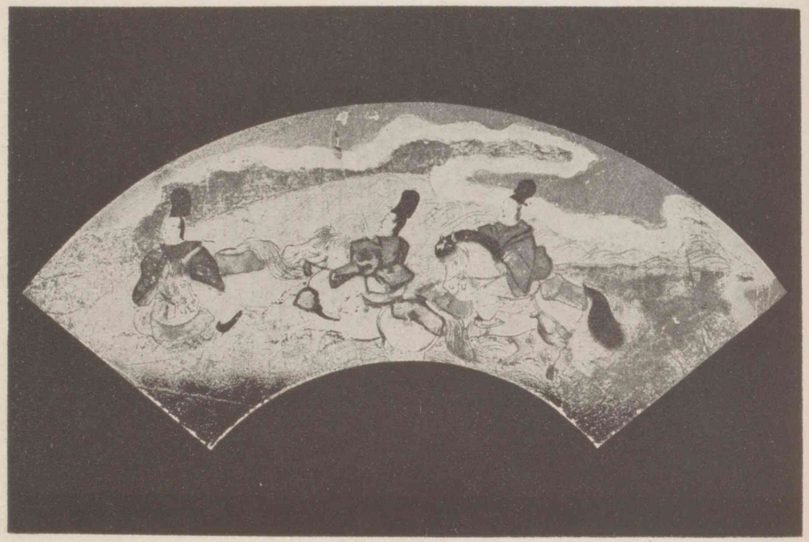
見し人を松のちとせに見ましかばとほくかなしきわかれせましや

忘れがたく、くちをしきこと多かれど、えつくさず。とまれかくまれ、とくやりてむ。（土佐日記）

三　吾妻下り

むかし男ありけり。その男、身をやうなきものに思ひなして、京にはをらじ、住むべき處求めむとて行きけり。もとより友とする人、一人二人してもろともに行きけり。道知れる人もなくて惑ひ行きけり。

三河國八橋といふ處にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水の蜘蛛手に流れわかれて、木八つ渡せるによりてなむ、八橋とは



東下り　　俵屋宗達筆

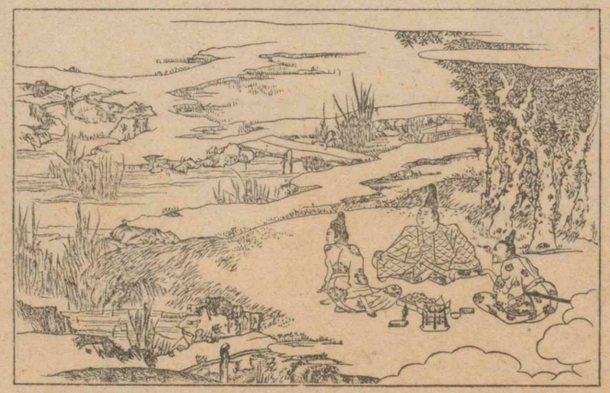
宇津山　今の靜岡縣（駿河國）志太郡岡部町の邊　靜岡市の西南十六粁

いひける。その澤のほとりの木のかげにおりゐて、かれいひくひけり。その澤に燕子花いと面白く咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上にすゑて旅のこゝろをよめ」。といひければ、よめる。

からころもきつゝなれにしつましあればはるゝ來ぬるたびをしぞ思ふ

とよめりければ、みな人餉の上に涙落して、ほとびにけり。

行き〳〵て駿河國にいたりぬ。宇津山にいたりて、わが入らむ



八橋

とする道はいとくらうほそきに、蔦かづらはしげりて、物心ぼそく、すゞろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。「かゝる道にはいかでかおはする」といふに、見れば、見し人なりけり。京に、その人のもとにとて、文書きてつく。

駿河なるうつの山べのうつゝにも夢にも人のあはぬなりけり

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降れり。

時知らぬ山はふじの嶺いつとてかかのこまだらに雪の降るらむ

その山は、こゝにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむほどして、形は鹽尻のやうになむありける。

なほ行き〳〵て、武藏の國と下總の國との中に、いと大きなる川

鹽尻　鹽田で砂を圓く積んで塚のやうにしたもの

かぐや姫
竹取の翁が竹林の竹の中から得てそだてあげた嬢子

あり、それを隅田川といふ。その川のほとりに群れゐて思ひやれば、限りなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守「はや舟に乗れ、日も暮れなむ」といふに、乗りて渡らむとするに、皆人もものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と脚と赤き、鴫の大きさなる、水の上に遊びつゝ魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、

名にし負はばいざことはむ都鳥わがおもふ人はありやなしやと

と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。（伊勢物語）

一三　かぐや姫

竹取の翁
野山に入つて竹を取ることを業とした老人名は讃岐造麿

春の初よりかぐや姫、月のおもしろう出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。或人の「月の顔見るは忌むこと」と制しけれども、ともすれば人まには、月を見ていみじく泣き給ふ。ふづきの望の月に出でゐて、切に物思へるけしきなり。近く使はる人々、竹取の翁に告げていはく、「かぐや姫例も月をあはれがり給ひけれども、この頃となりては、たゞ事にも侍らざめり。いみじく思し歎くことあるべし。よく〳〵見奉らせ給へ」といふを聞きて、かぐや姫にいふやう、「なでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見給ふぞ、うましき世に」といふ。かぐや姫、「月を見れば世の中心細くあはれに侍り。なでふものをか歎き侍るべき」といふ。かぐや姫のある處にいたりて見れば、なほ物思へるけしきなり。これを見て、「あが佛、何事を思ひ給ふぞ。思すら

むこと何事ぞ」といへば「思ふこともなし、物なむ心細く覺ゆる」といへば、翁「月な見給ひそ。これを見給へば、物おぼすけしきはあるぞ」といへば、「いかでか月を見ずてはあらむ」とて、なほ月出づれば出でゐつゝ歎き思へり。夕闇には物思はぬけしきなり。月の程になりぬれば、なほ時々は打歎き泣きなどす。これを、つかふものども、「なほ物おぼすことあるべし」とさゝやけど、親を始めて、何事とも知らず。

八月望ばかりの月に出でゐて、かぐや姫いといたく泣き給ふ。人目も今は包み給はず泣き給ふ。これを見て、親どもも「何事ぞ」と問ひ騒ぐ。かぐや姫泣く〳〵いふ「さき〳〵も申さむと思ひしかども、必ず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まで過し侍りつるなり。さのみやはとて打ちいで侍りぬるぞ。己の身はこの國の人にもあらず、月の都の人なり。それをなむ、昔の契ありけるによりてなむ、この世界にはまうで來たりける。今は歸るべきになりにければ、この月の望に、かの本の國より迎に人々まうで來むず。さらず罷りぬべければ、思し歎かむが悲しきことを、この春より思ひ歎き侍るなり」といひていみじく泣く。翁「こはなでふことを宣ふぞ。竹の中より見つけ聞えたりしかど、栄種の大きさおはせしを、わが丈立並ぶまで養ひ奉りたるわが子を、何人か迎へ聞えむ。まさに許さむや」といひて、「われこそ死なめ」とて泣きのゝしること、いと堪へ難げなり。かぐや姫のいはく、「月の都の人にて父母あり。片時のまとて、かの國よりまうで來しかども、かくこの國には、數多の年を經ぬるになむありける。かの國の父母の事も覺えず、こゝにはかく久しく遊び聞えてな

らひ奉れり。いみじからむ心地もせず、悲しくのみなむある。されど、己が心ならず罷りなむとする」といひて、諸共にいみじう泣く。使はるゝ人々も、年頃ならひて、立別れなむことを、心ばへなどあてやかに、美しかりつることを見ならひて、戀しからむことの堪へがたく、湯水も飲まれず、同じ心に悲しがりけり。

この事を帝聞し召して、竹取が家に御使遣はさせ給ふ。御使に竹取出であひて泣くこと限りなし。この事を歎くに、髪も白く、腰も屈まり、目も爛れにけり。翁今年は八十ばかりなりけれども、物思には片時になむ老になりにけると見ゆ。御使仰言とて翁にいはく、「いと心苦しく物思ふなるは、まことにか」と仰せ給ふ。竹取泣く〳〵申す、「この望になむ、月の都よりかぐや姫の迎にまうで來なる。たふとく問はせ給ふ。この望には人々賜はりて、

六衛　左右の近衛府・衛門府・兵衛府

嫗　竹取の翁の妻

塗籠　土藏造の建物

月の都の人まうで來ば、捕へさせむ」と申す。御使歸り參りて、翁の有樣申して、奏しつることども申すを聞し召して宣ふ、「一目見給ひし御心にだに忘れ給はぬに、明暮見馴れたるかぐや姫を遣りては、いかゞ思ふべき」とて、かの望の日司々に仰せて、勅使には少將高野大國といふ人を遣はして、六衛のつかさ合はせて二千人の人を竹取が家に遣はす。

家に罷りて、築地の上に千人、屋の上に千人、家の人々いと多かりけるに合はせて、あける隙もなく守らす。この守る人々も弓矢を帶して居り。母屋の内には、女どもを番にすゑて守らす。嫗、塗籠の内にかぐや姫を抱へて居り。翁も塗籠の戸をさして戸口に居り。翁のいはく、「かばかり守る處に、天の人にも負けむや」といひて、屋の上に居る人々にいはく、「つゆも物空に翔らば、ふと

射殺したまへ」。守る人々のいはく、「かばかりして守る處に、蝙蝠一つだにあらば、まづ射殺して、外にさらさむと思ひはべり」といふ。翁これを聞きて、賴しがり居り。

これを聞きて、かぐや姫は、「さし籠めて守り戰ふべきしたぐみをしたりとも、あの國の人をばえ戰はぬなり。弓矢して射られじ。かくさし籠めてありとも、かの國の人來ば、皆あきなむとす。あひ戰はむとすとも、かの國の人來なば、猛き心つかふ人よもあらじ」。翁のいふやう、「御迎に來む人をば、長き爪して眼をつかみつぶさむ、さが髪を取りてかなぐり落さむ、さが尻を搔きいでて、ここらのおほやけ人に見せて、恥見せむ」と腹立ち居り。

かぐや姫いはく、「聲高になのたまひそ。屋の上に居る人どもの聞くに。いとまさなし。いますかりつる志どもを、思ひも知らで罷りなむずることの口惜しう侍りけり。長き契のなかりければ、程なく罷りぬべきなめりと思ふが悲しく侍るなり。親たちのかへりみをいさゝかだに仕うまつらで罷らむ道も安くもあるまじきに、月ごろも出でゐて、今年ばかりの暇を申しつれど、更に許されぬによりてなむ、かく思ひ歎き侍る。御心をのみ惑はして去りなむことの悲しく堪へがたく侍るなり。かの都の人は、いと淸らにて、老いもせずなむ、思ふこともなく侍るなり。さるところへまからむずるも、いみじくも侍らず。老い衰へたまへるさまを見奉らざらむこそ戀しからめ」といひて泣く。翁「胸痛きことなしたまひそ。うるはしき姿したる使にも障らじ」とねたみ居り。

かゝる程に宵うち過ぎて、子の時ばかりに、家のあたり晝の明さ

にも過ぎて光りたり。望月の明さを十あはせたるばかりにて、ある人の毛の穴さへ見ゆる程なり。大空より人雲に乗りて、降り來て、地より五尺ばかりあがりたる程に立ちつらねたり。これを見て、内外なる人の心ども、物に魔はるゝやうにて、相戰はむ心もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓矢を取立てむとすれども、手に力もなくなりて、痿え屈まりたる中に、心さかしきもの、念じて射むとすれども、外ざまへ往きければ、何れも戰はで、心地たゞしれに

羅の月夜
吉村忠夫畫

しれてまもりあへり。

立てる人どもは、裝束の清らなること物にも似ず。飛ぶ車一つ具したり。羅蓋さしたり。その中に王とおぼしき人、「家に造麿まうで來」といふに、猛く思ひつる造麿も、物に醉ひたる心地して、うつぶしに伏せり。いはく、「汝をさなき人、聊かなる功德を、翁つくりけるによりて、汝が助にとて片時のほどとて降ししを、そこらの年頃、そこらの金賜ひて、身を換へたるが如くなりにたり。かぐや姫は罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれが許に、暫しおはしつるなり。罪の限りはてぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き歎く。能はぬことなり。はや返し奉れ」といふ。翁答へて申す、「かぐや姫を養ひ奉ること二十年餘りになりぬ。片時と宣ふに怪しくなり侍りぬ。又他處に、かぐや姫と申す人ぞおはし

ますらむ」といふ。「こゝにおはするかぐや姫は、重き病をし給へば、え出でおはしますまじ」と申せば、その返事はなくて、屋の上に飛ぶ車をよせて、「いざかぐや姫、穢き處に、いかで久しくおはせむ」といふ。立てこめたるところの戸、即ちたゞあきにあきぬ。格子どもも、人はなくしてあきぬ。嫗抱きてゐたるかぐや姫、外に出でぬ。え留むまじければ、たゞさし仰ぎて泣居り。

竹取心惑ひて泣きふせる處に寄りて、かぐや姫いふ、「こゝにも心にもあらで、かく罷るに、昇らむをだに見送り給へ」といへども、何しに悲しきに見送り奉らむ。われをばいかにせよとて棄てては昇り給ふぞ。具して率ておはせね」と泣きて伏せれば、御心惑ひぬ。「文を書置きて罷らむ。戀しからむをり〳〵、取出でて見給へ」とて、打泣きて書くことは、

この國に生れぬるとならば、歎かせ奉らぬほどまで侍るべきを、侍らで過ぎ別れぬること、かへす〳〵本意なくこそおぼえ侍れ。脱ぎおく衣をかたみと見給へ。月の出でたらむ夜は見おこせ給へ。見すて奉りてまかる空よりも墜ちぬべき心地す。

と書置く。

天人の中に持たせたる箱あり。天の羽衣入れり。又あるは不死の藥入れり。一人の天人いふ、「壺なる御藥奉れ、穢き處のものきこしめしたれば、御心地惡しからむものぞ」とて、持てよりたれば、聊か嘗め給ひて、少しかたみとて、脱ぎおく衣に包まむとすれば、或天人包ませず、御衣を取出でて着せむとす。そのときにかぐや姫「しばし待て」といひて、「衣着つる人は心ことになるなり。」と

いふ。物一言いひ置くべきことありけり」といひて文書く。天人遲しと、心もとながり給ふ。かぐや姫「物知らぬことなのたまひそ」とて、いみじくしづかにおほやけに御文奉り給ふ。あわてぬさまなり。

かく數多の人を賜ひて留めさせ給へど、許さぬ迎まうで來て、取率てまかりぬれば、口惜しく悲しきこと。宮仕つかうまつらずなりぬるも、かく煩はしき身にて侍れば、心得ず思し召しつらめども、心强くうけたまはらずなりにしこと、なめげなるものに思し召しとゞめられぬるなむ、心にとまり侍りぬる。

とて、

いまはとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれとおもひいでぬる

頭中將
近衛中將兼藏人頭

とて、壺の藥添へて、頭中將を呼寄せて奉らす。中將に天人取りて傳ふ。中將取りつれば、ふと天の羽衣打着せ奉りつれば、翁をいとほし悲しとおぼしつることも失せぬ。この衣着つる人は、物思もなくなりにければ、車に乘りて、百人ばかり天人具して昇りぬ。その後翁・嫗、血の涙を流して惑へどかひなし。あの書置きし文を讀みて聞かせけれど、「何せむにか、命も惜しからむ。誰が爲にか、何事もやうもなし」とて、藥もくはず、やがて起きもあがらで病みふせり。

中將人々を引具してかへり參りて、かぐや姫をえ戰ひ留めずなりぬることをこまゝ〳〵と奏す。藥の壺に御文添へてまゐらす。ひろげて御覽じて、いとゞいたくあはれがらせ給ひて、物もきこしめさず、御遊などもなかりけり。大臣・上達部を召して、「いづれの

山か天に近き」と問はせたまふに、ある人奏す、「駿河國にあるなる山なむ、この都も近く、天も近く侍る」と奏す。これを聞かせたまひて、

あふことも涙にうかぶわが身には死なぬくすりも何にかはせむ

かの奉る不死の藥の壺に、御文具して、御使にたまはす。勅使には月岩笠といふ人を召して、駿河國にあなる山の頂にもて行くべきよし仰せ給ふ。峯にてすべきやう教へさせ給ふ。御文・不死の藥の壺ならべて、火をつけて燃すべきよし仰せ給ふ。そのよし承りて、兵士ども數多具して山へ登りけるよりなむ、その山をふしの山とは名づけける。その煙いまだ雲の中へたちのぼるとぞいひ傳へたる。（竹取物語）

親鸞
日野有範の長子
淨土眞宗の開祖
弘長二年（一二六三）
寂
年九十
勅諡見眞大師

西田幾多郎
哲學者
文學博士
京都帝國大學名譽教授
明治三年（一八七〇）
加賀國（石川縣）
金澤生

一四　愚禿親鸞

西田幾多郎

余は眞宗の家に生れ、余の母は眞宗の信者であるに拘らず、余自身は眞宗の信者でもなければ、また眞宗に就いて多く知るものでもない。たゞ聖人が在世の時、自ら愚禿と稱し、この二字に重きを置かれたといふ話から、余の知る所を以て推すと、愚禿の二字は能く聖人の人となりを表すと共に、眞宗の教義を標榜し、兼ねて宗教そのものの本質を示すものではなからうか。

人間には智者もあり、愚者もあり、德者もあり、不德者もある。しかしいかに大なりとも、人間の智は人間の智であり、人間の德は人間の德である。三角形の邊はいかに長くとも、總べての角の和が二直角に等しいといふには何の變りもなからう。たゞ翻

コペルニクス
プロシヤの人
現在の天文學の開祖
（西暦一四七三―一五四三）

トレミ
西暦二世紀の前半ごろのアレキサンドリヤの人
天文學者・地理學者・數學者

禪師
法融
四祖大師に攝せられて牛頭山法といふ一派を開いた

牛頭山
支那江南の潤州にある禪寺

四祖大師
支那の禪宗第四世の祖道信

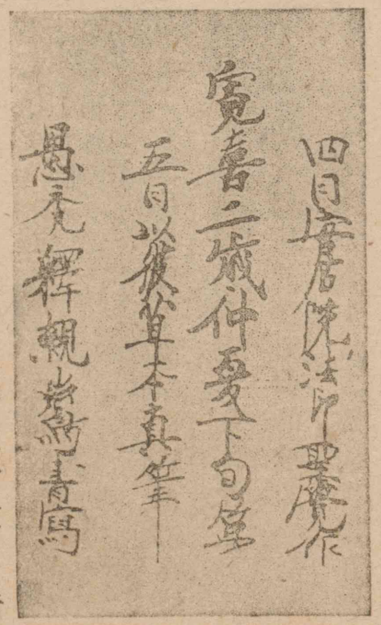
身一回、この智、この德を捨てた所に、新な智を得、新な德を具へ、新な生命に入ることができるのである。これが宗教の神髓である。宗教のことは世の所謂學問・知識と何等交渉もない。コペルニクスの地動說が眞理であらうが、トレミの天動說が眞理であらうが、さういふことはどちらでもよい。德行の點から見ても、宗教は自ら德行を伴なひ來るものであらうが、また必ずしもこの兩者を同一視することは出來ぬ。

親鸞聖人
京都本願寺藏

昔、融禪師が牛頭山の北巖に棲んでゐた時には、色々の鳥が花を啣んで供養したが、四祖大師に參じてからは、鳥が花を啣んで來

筆蹟
四日安居院ノ法印聖覺ノ作
寛喜二歲仲夏下旬第五日彼ノ草本ノ眞筆ヲ以テ愚禿釋親鸞書寫ス

なくなつたといふ話を聞いたことがある。宗教の智は智そのものを知り、宗教の德は德そのものを用ひるのである。三角形の幾何學的性質を究めるには、紙上の一小三角形で澤山であるやうに、心靈上の事實に對しては、英雄豪傑も匹夫匹婦と同一である。たゞ眼は眼を見ることが出來ず、山にある者は山の全體を知ることが出來ぬ。この智、この德の間に頭出頭沒する者は、この智、この德を知ることが出來ぬ。何人であつても、赤裸々たる自己の本體に立返り、一たび懸崖に手を撒して絕後に蘇つた



親鸞聖人筆

ものでなければ、これを知ることが出來ぬ。即ち深く愚禿の愚禿たる所以を味はひ得たもののみこれを知ることが出來るのである。聖人の愚禿はかくの如き意味の愚禿ではなからうか。他力といはず、自力といはず、一切の宗教はこの愚禿の二字を味はふに外ならぬのである。

しかし、右の様にいへば、愚禿の二字は獨り眞宗に限つた譯でもない様であるが、眞宗は特にこの方面に着眼した宗教である、愚人・惡人を正因とした宗教である、絶對的愛・絶對的他力の宗教である。いかなる愚人、いかなる罪人に對しても、彌陀はたゞ汝の爲に我は粉骨碎身せりといつて、これを迎へられるのが眞宗の本旨である。

終りに宗祖その人の人格に就いて見ても、彼の日蓮上人が意氣

吉水一門
東山の吉水で淨土宗を説いた源空即ち法然上人の門弟たち

北國の隅に
親鸞は承元元年（一八七）越後に流され五年目に赦された

法然
名は源空
淨土宗の開祖
京都東山吉水の草庵で念佛の教を説いた
美作の人
建暦二年（一八二）寂
年八十
勅諡圓光大師

冲天、他宗を罵倒し、北條氏を目して「小島の主等が云々」と壯語したのに比べて、吉水一門の奇禍に連なり、北國の隅に流されながら、「若し我配所に赴かずんば、何によりてか邊鄙の群類を化せん」といつて、法を見て人を見なかつた親鸞聖人の人格は、頗る趣を異にしたものと謂はねばならぬ。風號び雲走り、怒濤澎湃の間に立つて動かざること巖の如き日蓮聖人の意氣も壯なことは壯ではあるが、煙波渺茫、風靜かに波動かざる親鸞上人の胸懷は、また何となく奥ゆかしいではないか。（思索と體驗）

一五　おもかげ

一枚起請文　　法　　然

もろこし・わが朝にもろ〳〵の智者達の沙汰し申さるゝ觀念の

三心
　浄土往生の安心
　至誠心
　深心
　廻向發願心
四修
　佛道修行の相
　長時修
　慇重修
　無餘修
　無間修
二尊
　阿彌陀佛
　釋迦牟尼佛
本願
　阿彌陀佛の四十八願
　その第十八願は念佛往生願

念にもあらず。又學問をして念の心を悟りて申す念佛にもあらず。たゞ往生極樂のためには、南無阿彌陀佛と申せば疑なく往生するぞと思ひとりて申す外には、別の子細候はず。

法然上人
史料編纂所藏

但し三心四修なんど申すことの候は、皆決定して、南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふ内に籠りて候なり。この外に奥深きことを存ぜば、二尊の御憐にはづれ、本願にもれ候ふべし。念佛を信ぜん人は、たとひ一代の法をよく〳〵學すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じくして、智者の振舞をせずして、只一向に念佛すべし。（法然上人集）

道元
久我通親の子
宋に留學すること五年
歸朝後京都の建仁寺深草の興聖寺に居た
越前永平寺の開山
建長五年（一九二歳）寂
年五十四
勅諡承陽大師

懷奘
曹洞宗の高僧
永平寺の初祖道元禪師の高弟
永平寺第二代
弘安三年（一九〇）寂
年八十三
示して云く
道元禪師の教示

學道

道元述
懷奘受

示して云く、學道の人、身心を放下して一向に佛法に入るべし。古人云く、「百尺竿頭如何んか歩を進めん」と。しかあれば、百尺の竿頭に上りて足をはなたば死ぬべしと思うて、つよく取附く心のあるなり。それを一歩を進めよといふは、よもあしからじと思ひ切つて身命を放下するやうに、度世の業よりはじめて一身の活計に至るまで思ひすつべきなり。そ

道元自畫像
永平寺藏

唯圓　親鸞の弟子　茨城縣（常陸國）東茨城郡河和田村泉慶寺の開基

南都　奈良の東大寺及び興福寺

北嶺　比叡山延暦寺

れを捨てざらんほどは、いかに頭燃を拂うて學道するやうなりとも、道を得ることはかなふべからざるなり。たゞ思ひ切つて身心共に放下すべきなり。（正法眼藏隨聞記）

念佛

親鸞述
唯圓受

おの〳〵十餘箇國の境を越えて、身命を顧みずして尋ね來らしめ給ふ御志、ひとへに往生極樂の道を問ひ聞かんが爲なり。然るに「念佛より外に往生の道をも存知し、又法文等をも知りたるらん」と心にくゝ思し召しておはしましてはんべらんは、大きなる誤なり。もし然らば、南都北嶺にもゆゝしき學匠たち多くおはせられて候なれば、彼の人々にも會ひ奉りて、往生の要よくよく聞かるべきなり。親鸞におきては「たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべし」と、よき人の仰を蒙りて、信ずるほかに別の子細なきなり。念佛はまことに淨土に生るゝ種にてやはんべるらん、又地獄に墮つべき業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人に賺されまゐらせて念佛して地獄に墮ちたりとも、更に後悔すべからず候。その故は自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛を申して地獄にも墮ちて候はばこそ「賺されたてまつりて」といふ後悔も候はめ。いづれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定住處ぞかし。彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の說教虛言なるべからず。佛說まことにおはしまさば、善導の御釋虛言したまふべからず。善導の御釋まことならば、法然の仰虛言ならんや。法然の仰まことならば、親鸞がまをす旨またもて虛しかるべからず

善導　支那の隋唐の間の高僧　觀經の疏を著し淨土敎の經格を創立した　唐の高宗の開耀元年（六八一）寂　年六十九

土牢御書
文永八年（一二七一）十月九日鎌倉の土牢にある高弟日朗におくつた日蓮の書狀

日蓮
日蓮宗の開祖
安房の人
文應元年（一二六〇）立正安國論を幕府に上つて伊東に流され文永八年龍口で斬られようとして鎌かに免れ佐渡に流され十一年赦されて歸り甲州身延山を開いた
弘安五年（一二八二）武藏の池上で入寂六十一年
勅諡立正大師

殿
筑後房日朗
文永八年土牢に入れられた日蓮を佐渡に訪ふこと八回常に米を負うていつた
元應二年（一三二〇）寂年七十八

候歟。詮ずるところ、愚身の信心におきては此の如し。この上は念佛をとりて信じたてまつらんとも、また棄てんとも面々の御はからひなり。（歎異鈔）

日蓮上人肖像資料集

土牢御書

日蓮

日蓮は明日佐渡の國へまかるなり。今夜の寒きにつけても、牢の中の有樣思ひやられて痛はしくこそ候へ。あはれ殿は法華經一部を色心二法共に遊ばしたる御身なれば、父母・六親・一切衆生をも助け給ふべき御身なり。法華經を餘人の讀み候は、口ばかり言ばかりは讀めども心は讀まず、心は讀めども身に讀まず。色心二法共に遊ばされたるこそ貴く候へ。「諸天童子、以爲給使、刀杖不加、毒不能害」と說かれて候へば、別の事はあるべからず。牢をばし出でさせ給ひ候はば、とく〳〵來り給へ。見奉り、見え奉らん。恐々謹言。（高祖遺文錄）

諸天童子
法華經普門品の語

幸田露伴
名は成行
文學者
文學博士
帝國藝術院會員
文化勳章第一回の拜受者
慶應三年（一八六七）江戸生

大海の百川を呑む
百川海ヲ學ビテ海ニ至ル。（揚子方言）

一六　大丈夫の覺悟

幸田露伴

大丈夫、苟も身を學藝に委ねんとせば、受發の二途に於て大丈夫の覺悟あらんことを要す。發とは外に內の發するなり、受とは內の外に受くるなり。受くることは須く大海の百川を呑むが如くなるべし、發することは宜しく甘雨の八方に澆ぐが如くなるべし。受くることの多からざらんを嫌ひて、川の大、川の小を

嫌はず、發することの豐ならざらんを恐れて、方の東、方の西を問はず。これを受發二途に於ける大丈夫の覺悟とす。

受は發の本なり、發は受の末なり。途は二にして實は一。受をよくすれば發はその中に在り。大賢は能く受く、中才は勉めて能く受く、賤人は好んで受くるあり、敢へて受けざるあり。誓つて必ず賤人たらざらんを期する、これを眞に身を學藝に委ぬといふ。受の途に於て工夫刻苦するものは學藝を成すに庶幾からん。受の途に於て大丈夫の覺悟なきものは、爲すにだに堪へざらんとす。何ぞ成ることあらん。

評の性は多く褒貶毀譽を具し、人の情は常に譽を愛し、褒を愛して、毀を惡み、貶を惡む。こゝに於て毀譽褒貶の我が頭上に加へらるゝや、大丈夫の覺悟なき者、或は徒に懼れ、或は徒に驕り、或は

擊壤の歌
日出デテ耕シ、日入リテ息フ。井ヲ鑿チテ飲ミ、田ヲ耕シテ食フ。帝力奚ソ我ニ在ランヤ。
（史記）

舜の詩
南風ノ薰ズル、以テ吾ガ民ノ慍ヲ解ク可シ。南風ノ時ナル、以テ吾ガ民ノ財ヲ阜ニス可シ。
（孔子家語）

人を恨み、或は自ら足れりとして、惜しむべし、堂々たる六尺の身他人に簸弄せられたるを悟らず。人を颱風にし、我を粃糠にす。實に自ら待つの薄きのみならず、抑〻また學藝に負くこと多しといふべし。大丈夫豈かくの如くなるべけんや。それ大海の百川を呑む、大も亦呑む、小も亦呑む、清も亦辭せず、濁も亦辭せず。日に默々たり、洋々たり、而して、漸く我が大を成し、徐ろに我が大を用ひ、日に活潑々たり、圓陀々たる大作用をなす。大賢の人の言を受くる、亦かくの如し。精雜密疎の說、毀譽褒貶の評、皆一齊にこれをして日に進ましむるあらんことを願はざる無し。古人まことに此の如し。則ち堯舜の聖、批評を如何ともするなしといへど、批評も亦堯舜の聖を如何ともするなし。擊壤の歌は誰か堯の德を傷つくるものとなさん。舜の詩猶存すれども、誹

謗の木の文は今何處にかある。

この故に、學藝に志ある者は能く外に受くる大賢の如くなる能はずとも、勉めて己に克つて人に受くべし。饒舌の分疏は老婆の醜態、逆耳の言に聽かざるは好漢にあらじ。縱令、滿面の垢辱、堪へんとして堪ふる能はず、筋張り、血湧き、劍を拔いて直に報いんと欲するに至るとも、亦先づ牙關を咬定して隱忍し、頭を垂れ、心を虛しくする工夫の裏より一天地を拓き得て、笑つて、立つて、謝して、牛溲馬勃を我が藥籠中に收むるが如くならんを期すべし。これを大丈夫の受の覺悟といふ。

人貶すれば便ち受けずして胡言亂說し、人讚すれば便ち默受して欣々たる如きは、閨閤の兒女に在つては咎むべくもなし、學藝の士に在つては甚だ鄙しむべしとす。古に曰く、「峻谷に入る者は當に葛藟を攀ぢて顚墜を免るべし、時俗に處る者は當に道義に據りて而して後、自立するを得ん。」と。學藝に遊ぶものは當に反求の功に賴るべし、漸く深造するあらん。唯反求の功に賴る、則ち揚げらるゝも自滿せず、抑へらるれば愈〻奮ふに足らん。

徐子曰く、「身を立つる、人の譽むる所とならずして人の謗る所となる者は、未だ善をなす理を盡くさざればなり。善をなす理を盡くす者は將に舜の若くならんとす。舜と同じからずとも、それ敢へてこれを謗る者あらんや。故に語に稱す、『寒を救ふは裘を重ぬるに若くはなし、謗を止むるは身を修むるに如くはなし。』と。」善いかな言や、能く大丈夫の覺悟を說けりといふべし。

大丈夫當に受發の二途に於て、大丈夫の覺悟を以て立ち、而して學藝に盡くすあるべし。子思曰く、「能くその心に勝つ、人に勝つ

徐子　徐幹　字は偉長　後漢の末魏の初の人　中論の著者

子思　名は伋　孔子の孫　中庸の著者

に於て何かあらん。能くその心に勝たず、人に勝つを如何せん。」と。爲す所ありて美とせられず、内に求めずして人に責むる、その情は憫むべし、その爲は悲しむべし。我豈、人の勝つを好むを陋とするのみならんや、我また實にこれを愧づ。倣はんかな海や、百川それ海を如何せん。（論言）

院　後鳥羽上皇
東ざま　關東なる北條方

一七　新島守

さても院の思し構ふること忍ぶとすれどやう〳〵漏れ聞えて、東ざまにもその心づかひすべかめり。あづまの代官にて伊賀判官光季といふものあり。かつ〳〵彼を御勘事のよし仰せらるれば、味方に參る武士ども押寄せたるに、遁るべきやうなくて腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ院は思し召しける。

時房　義時の弟　執權連署　仁治元年（一二〇〇）卒　年六十六
泰時　義時の長子　北條第三代の執權　仁治元年（一二〇〇）卒　年六十
義時　時政の第二子　北條第二代の執權　元仁元年（一二二四）卒　年六十二

東にもいみじうあわて騒ぐ。さるべくて身の失すべき時にこそあんなれと思ふものから、討手の攻來りなむ時に、はかなきさまにて屍を曝さじ、おほやけと聞ゆとも自らし給ふことならねば、かつは我が身の宿世をも見るばかりと思ひなりて、弟の時房と泰時といふ一男と二人を頭として、雲霞のつはものをたなびかせて都にのぼす。泰時を前にすゑて言ふやう、「おのれをこの度都にまゐらすることは思ふ所多し。本意の如く清き死をすべし。人に後見えなむには親の顏また見るべからず。今を限りと思へ。賤しけれども義時君の御爲に後めたき心やはある。されば横ざまの死をせむことはあるべからず、心を猛く思へ。おのれうち勝つものならば、二度この足柄・箱根山は越ゆべし」など泣く〳〵言聞かす。「まことにしかなり。復親の顏拜まんこ

ともいと危し」と思ひて、泰時も鎧の袖を絞る。互に今やかぎりと哀に心細げなり。

かくてうち出でぬる又の日、思ひかけぬ程に泰時たゞ一人鞭をあげて馳せ來たり。父胸うち騒ぎて「いかに」と問ふに、「軍のあるべきやう、大方のおきてなどをば、仰の如くその心を得侍りぬ。若し道のほとりにも、圖らざるに辱く鳳輦を先立て御旗をあげられ、臨幸の嚴重なることも侍らむに參りあへらば、その時の進退いかゞ侍るべからむ。この一事をたづね申さむとて一人馳せ侍りき」といふ。義時とばかりうち案じて、「畏くも問へる男かな。その事なり、まさに君の御輿に向ひて弓を引くことはいかがあらむ。さばかりの時は、兜を脱ぎ弓の弦を切りて、偏にかしこまりを申して、身をまかせ奉るべし。さはあらで、君は都にお

君
後鳥羽上皇

六月二十日
仲恭天皇の承久三年（一八一）

はましながら軍兵をたまはせば、命を捨てて千人が一人になるまでも戰ふべし」と言ひも果てぬに、急ぎ立ちにけり。

いつの年よりも五月雨霽間なくて、富士川・天龍などえもいはず漲りさわぎて、いかなる龍馬も打渡し難ければ、攻めのぼる武者どももあやしく艱めり。かゝれども遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の御武者も出立つ。その勢六萬餘騎とかや。宇治・瀨田へ分ち遣はす。世の中ひゞきのゝしるさま、言の葉も及ばず、まねびがたし。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界に落下り、すべて安げなく騒ぎみちたり。いかゞあらむと、君も御心亂れておぼし惑ふ。豫ては猛く見えし人々も、まことの際になりぬれば、いと心あわたゞしく、色を失ひたる樣ども頼しげなし。

六月二十日餘りにや、いくばくの戰だになくて、遂に味方の軍敗

女院・宮々
後鳥羽上皇の御生母七條院
御后藤明門院
皇子雅成親王・
頼仁親王等

本院
後鳥羽上皇
ものにもがなや
とりかへすもの
にもがなや世の
中をありしなが
らのわが身と思
はむ（源氏物語、
帯木）

信實
右京權大夫藤原
信實
畫を善くし特に
寫生に長ず
文永二年（一九二五）
卒
年八十九

七條院
典侍藤原殖子
後鳥羽天皇の御
生母
安貞二年（一八八）
薨
年七十二

れぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはむ方なくあきれて、上下たゞものにぞ當り惑ふ。あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍計らひおきてつゝ、保元の例にや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院・宮々、處々におぼし惑ふこと更なり。

本院は隱岐の國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ、網代車のあやしげなるにて、七月六日入らせたまふ。今日を限りの御ありき、あさましうあはれなり。「ものにもがなや」とおぼさるゝもかひなし。その日、やがて御ぐしおろす。御年四十に一つ二つや餘らせたまふらむ。まだいとほしかるべき御程なり。信實朝臣召して、御姿寫し書かせらる。七條院へ奉らせ給はむとなり。かくて同じ十三日に御船に奉りて、遙かなる波路を凌ぎお

新院
順德上皇
帝
仲恭天皇

八二
後鳥羽
八三
土御門
八八
後嵯峨
八四
順德
八五
仲恭

中院
土御門上皇

はします御心ち、この世の同じ御身ともおぼされず、いみじう、いかなりける世々の報にかとうらめし。新院も佐渡の國に遷らせ給ふ。まことや七月九日、帝をもおろし奉りき。この卯月かとよ、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にておりたまへるためしも、これや始なるらむ。さて上達部殿上人それより下、はた殘りなく、この事に觸れにし類は、重く、輕く、罪に當る樣いみじげなり。

後鳥羽天皇御影
藤原信實畫

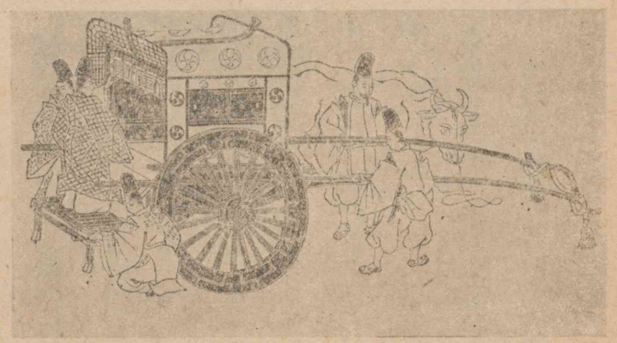
中院は初よりしろしめさぬことなれば、東にも咎め申さねど、「父

幡多　土佐國（高知縣）の西端にある大郡

若宮　邦仁親王　後に後嵯峨天皇

源通親
- 通宗
  - 通子　後嵯峨天皇生母
- 通方
  - 承明門院在子　土御門天皇生母

の院遙かに遷らせ給ひぬるに、のどかにて都にあらむことといと恐あり。」とおぼされて、御心もて、その年閏十月十日、土佐國の幡多といふ處に渡らせ給ひぬ。去年の二月ばかりにや、若宮いできたまへり。承明門院の御兄人に通宗の宰相中將とて、若くて失せたまひにし人の娘の御腹なり。やがてかの宰相の弟に通方といふ人の家に留め奉りたまひて、近く侍ひける北面の下臈一人、召次などばかりぞ御供仕うまつりける。いとあやしき御手輿にて下らせたまふ。道すがら雪



網代車　輿車圖考

津の國のこや　津の國のこやとも人のいふべきにひまこそなけれ葦の八重葺（後拾遺集、和泉式部）

かきくらし、風吹荒れ、吹雪して、來し方往く先も見えず、いと堪へ難きに、御袖もいたく凍りて、わりなきこと多かるに、

うき世にはかゝれとてこそ生れけめことわり知らぬわが涙かな

「せめて近き程に」と東より奏したりければ、後には阿波國に遷らせたまひにき。

さても本院は、六つにて位に即きたまひて、十三年おはしましき。下りたまひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下は同じことなりしかば、すべて三十六年が程この國のあるじとして、萬機の政を御心一つにをさめ、百の官を從へたまへりしそのほど、吹く風の草木を靡かすよりもまされる御有樣にて、遠きをあはれみ、近きを撫でたまふ御惠、雨の脚よりもしげければ、津の國

のこやのひまなき政を聞しめすにも、難波の葦の亂れざらむことをおぼしき。藐姑射の山の峯の松も、やう〳〵枝をつらねて千代をかさね、霞の洞の御すまひ、幾春を經ても空ゆく月日の限り知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、あり〳〵てよしなきひとふしに、今はかく花の都をさへたち別れ、おのがちりぢりにさすらへ、磯の苫屋に軒をならべて、おのづからことふものとては、浦に釣する海士小舟、鹽やく煙の靡く方をも、わが故郷のしるべかとばかりながめすごさせたまふ御すまひどもは、それまでと月日を限りたらむだに、明日知らぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まいて何時を果とか廻り逢ふべき限りだになく、雲の波、煙の波の幾重とも知らぬ境に世を盡くし給ふべき御有樣ども、くちをしともおろかなり。

藐姑射の山
仙人の居る山
仙洞御所にいふ
藐姑射ノ山ニ神人アリ、居ル。肌膚氷雪ノ若ク、淖約處子ノ若シ。(莊子、逍遙遊篇)

このおはします處は、人ばなれ、里遠き島の中なり。海づらよりは少し引入りて、山陰にかたそへて、大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかり、ことそぎたり。誠に「柴の庵のたゞしばし」とかりそめに見えたる御宿りなれど、さるかたになまめかしく、故づきてしなさせたまへり。水無瀨殿おぼし出づるも夢のやうになむ。はる〳〵と見やらるゝ海の眺望、二千里の外ものこりなき心地する、今更めきたり。潮風のいとこちたく吹來るを聞しめして、

われこそは新島守よおきの海のあらきなみかぜこゝろして

吹け　（增鏡）

柴の庵
いづくにもすまれずばたゞすまであらむ柴のいほりのしばしなる世に（新古今集、西行）

水無瀨殿
攝津國（大阪府）三島郡水無瀨に御造營遊ばされた後鳥羽上皇の御離宮

二千里の外
三五夜中新月ノ色。二千里外故人ノ心。（唐の白樂天）

上田秋成
國學者
文化七年（一八一〇）歿
年七十八

鎌倉の大將
右近衛大將源頼朝

一八　月の前

上田秋成

文治
後鳥羽天皇の御代（一八四年―一八四九）

圓位
西行法師

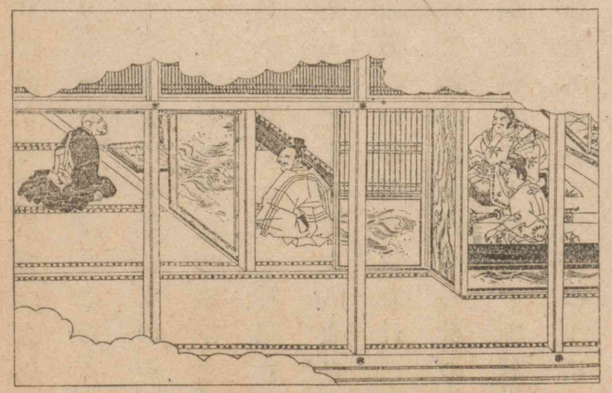
穴熊の
西伯將ニ獵セントシ之ヲトトス。曰ク、龍ニ非ズ、螭ニ非ズ、熊ニ非ズ、羆ニ非ズ、虎ニ非ズ、獲ル所ハ霸王ノ輔ナラント。果シテ呂尚ニ渭水ノ陽ニ遇フ。（史記）

文治それの年の秋八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ。例の事にて、御供つかうまつる人々、御前おひ、御あとべつかうまつれる、渚に遊ぶ蘆鶴のあゆみして、疾からず、遲からず、つらを亂さずねり出でさせ給へるを、大路に膝折伏せ、かしこみたいまつれる人數多あるに、お前拂ひしてあなとだにいはせず、よにいかめしく貴き御有樣なり。かへりまをしして、御手輿に召させ給ふほど、御階の忌垣のもとに畏まりをる法師のあなるが、見上げ奉るつらつき、なほ人ならず思しけむ、御輿ぞひの若侍して問はせ給ふ。ゆくりなきに驚きたる樣して、「雲水にありか定めず侍るものにて、名は圓位と申す」といふ。聞し召されて、「さればこそ聞知りたれ。穴熊のたけき獲物の類ならで、賢き人獲たるためしに、誘ひかへらむ。わがあとにつきて來れとい

藐姑射の山の御宮仕
はじめ西行は鳥羽上皇に仕へて北面の士となつた

へ」とて召連れさせ給へり。

御館に入らせ、御裝束改めさせ給へば、やがておほとなぶらあまた照らしかゞやかせ給ひて、おましし近き處の一間なる簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、「昔は藐姑射の山の御宮仕せし人の、世をはかなきものに思ししみて、身は黑うやつしたれど、月花のなげきの響は、物の心なき東人さへ聞知りたるぞ。弓取りし人のもとの心の猛きには、よむ歌も直くあからさまにと聞くはまこと



類朝西行に兵を問ふ
百人一首一夕話

大風起り
大風起リテ雲飛揚ス。威海内ニ加ハリテ故郷ニ歸ル。（史記、漢高祖）
烏鵲南に
月明カニ星稀ニ、烏鵲南ニ飛ブ。（魏の曹操）

か。歌は武士のあら〳〵しき心には詠みうつすまじきものに宮人たちは沙汰し給へりとや。軍に出立ちて、笛・鼓の音、馬の嘶は物とも思はぬを、このみそぢ餘りのまなびには心のおくるゝはいかに。「こはかしこき御心にも思し惑はせ給ふものか。古の代々の帝は、馬の鞍おき、弓矢とらして、軍に立たせ給ひき。その御歌をよみ奉れば、猛く直く、調もいと高しとこそ打聞き侍れ。いでや歌詠まむとては、益荒雄心をとり隱し、あてになよびかにのみ詠みうつすべくするこそ、この道のいみじき累なれ。君がさとくたげき御心のまゝにうちいで給はむには、今の世の人たれかは立ちあへ奉らむ。三尺の劍を執りて『大風起り、雲飛揚す。』と歌ひ、槊を横たへて、『烏鵲南に』と詠ぜし君たちは、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや。」といふ。

秀郷
藤原氏
平將門を誅した功によつて功田を賜はつた後鎮守府將軍に任ぜられた贈正二位

「人々、あれ聞き給へ。世は捨て遁れても、賴しき人の心ならずや。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓矢の上手となむ聞ゆる。傳へたることもあるべし。かくこそと思ししみぬることは忘れずてこそあらめ。こと一言にても教へ承るべし。」「こは益・恐ある御問はせなり。つはものの道暫しも怠らせ給はぬ御心より、野山をすみかの痩法師にさへ物問はせ給ふことのかたじけなさよ。向ひ奉りては、をこがましく家の傳へなりなどと聞え奉るべうも覺え侍らず。ましてありがたき大宮仕をいなみ奉り、親のいつくしみをさへあだなるものにして、年纔かに二十三にて家を出でたるいたづらものの、弦ひき一つだに心に留めしことも侍らず。たゞ一言の忘れがたきは、『賞を重くし、罰を輕くせよ。』といひしと、『任ずる者を辱しむれば危し。』といひし

疽を病めるを衛の吳起
竈を減じて齊の孫臏

とのありがたさよ。士卒の疽を病めるを吮ひしは人の心をよく買ひなすと雖も、眞の情よりとも覺え侍らず。竈を減じて人を危きに陷るゝは、將帥のさかしきにて、國を治め天の下をしるべき君の御心にあらず。軍を出したまへることの、あやしきまでかしこくませるを、餘所ながら見聞き奉るには、この御問ゆるさせ給へ」とて、額を板敷に摺りつけて申す。

君笑み誇らせ給ひ、「口とく心さとき法師なり。今宵は月見る夜ぞ。物語今は果してむ。人々と土器をとりはやし、曉かけて遊ばむ。まれ人は酒飲まざるべし。鹿猿のなかに立交りて歌よめといふともよむまじ。たゞわが前に遊べ。風冷やかなるにも飽かず飲み、物きたなげに食ひちらす人々は煖かにこそ。この火取、法師に參らせよ」とて、白銀もてつくりたる猫の形したるを取傳へて、君より賜ふとて、前に置きたり。「鹿猿は尙心たけし。鼠をだにえとらぬ獲法師が爲には、似つかはしき御賜ぞ」とて、三度押戴きぬ。

西行法師　谷口香嶠筆

あした御暇賜はりて立出づるに、御館の人宿りに、誰が殿の童ならむ、くゝり袴の裾、朝露に濡れそぼちて、いと寒げにをるを見て、「これ取らせむ。火埋みて手足煖めよ」とて、かのきらきらしき物を與へて、顧みもせず立去りぬ。童が主なる人、いとあやし。大將殿の法師に賜はせしを、いかで童に得させけむ」とて、

まづ急ぎて、聞え奉る。君打笑み給ひ、「かのえせ法師、あなづらはしくをさなげなる物くれしとて、腹だたしくや思ひけむ、わが門の前に捨てゆきつるよ。法師とても、男魂なくば修行もえせぬなるべし。されど家を出でてなほ身を守り、才に誇りて野山に交り、歌詠みてのみあるは、世捨人の捨てらるべきあさましさぞかし。一度汚れし物、その童に取らせよ。」とて、とりおろさせたまひぬ。

西行、後にこのことを人に語りていふ、「右府はまことにねぢけたる君なり。口に蜜し給へど、心には針のおはするぞ。漢高の大度、曹孟徳の智略あるに似て、天下の人皆この君の網の中に入れられたるは、神の冥福といふものを生れながら得させけむ。ただ悲しむべきは、神の御裔（みすゑ）の、この後やう〳〵衰へさせ給はむ世

漢高　漢の高祖劉邦
曹孟徳　魏の曹操　孟德はその字

心なき身にも
心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ澤の秋の夕暮
（西行法師）

石濱　隅田川の右岸　向島の對岸
加藤千蔭　號は芳宜園　江戸の國學者　賀茂眞淵の門人　文化五年（一八〇八）歿　年七十五
堀河・鳥羽　堀河・鳥羽の兩天皇

の姿なるは」とて、涙とゞめ難くして物語りつとなむ。心なき身にもこれを聞傳へては、秋の夕暮ならずも、うちひそみぬべし。

（藤簍冊子（つゞらぶみ））

一九　石濱の雨

加藤千蔭

葉月二十日あまり、秋のけはひのなつかしくて、例の隅田川のほとり石濱の庵に行きてやどりぬ。有明の月のにほひも、霧立ちわたる曉のさまも、處がら世に似ぬものから、こゝは雨のそぼ降る日なむ殊にあはれは深かりける。もとより萱ふける庵なれば、音だになくて、軒のしづくの三つ四つ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色づきたるがほろ〳〵と散るもあはれなり。水のおもては動くこともなくて鏡の如くなるに、雲の濃きうすきうつ

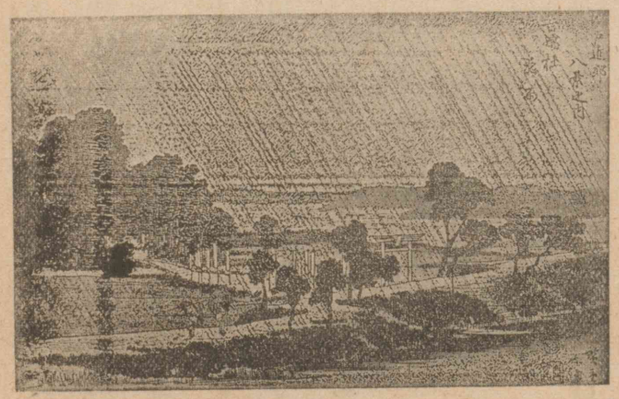
ろひて、かつ浮びかつ消ゆる水泡にこそ雨のけはひはしるかりけれ。みをの一筋は、さしひく潮にもまじらで、とはにはなだの色に流れいにて、沖に出づめり。

これや、水上の秋父の山の眞清水の落ち來るならむ。うち向ふ岸の榛原のみ濃き墨がきの如くなるが中に、はゝその黄ばみたるは、さすがにほのかに見えて、そのひまびまより長き堤の見えわたるに、堤のをちなる梢はやう〳〵に淡墨もてかきけちたらむごとく、いとしもはるけきは、たゞなびかぬ煙とのみぞ見ゆる。こゝかしこより鳥の飛びゆきつゝね

加藤千蔭
東京帝室博物館藏

ぐらの鷺のつばさおもげにおき出でて、川の瀬の眞菰におり立てば、みさごの群れきて水の面に浮べるもをかし。上つ瀬より、筏師の蓑笠着て棹を筏の上に横たへ、おのれたむだきて、思ふことなげにてをり。筏は水のまに〳〵流れ行くもしづけし。渡守舟さし出せば、大笠かたぶけてわたり行く人の、やがて堤をあるくさまも、繪によく似たり。すべてひと日のうちに、筑波嶺より吹きおろすかと思へば、沖よりも風通ひ來て、岸の木立も、長き堤も、あるは

筏師の
隅田川蓑着て下す筏師にかすむあしたの雨をこそ知れ（加藤千蔭）



雨の隅田川
安藤廣重筆

みくまりの神
水神森といふ
隅田川の上手の
左岸

村田春海
江戸の國學者
賀茂眞淵の門人
文化八年（一八一一）
歿
年六十六
文化の五年
光格天皇の御代
（一八〇八）

あらはれ、あるはかくれて、限りなき青海原にむかひたらむやうにおぼゆる折もありけり。かくてやゝ夕暮近くなりゆけば、むら鳥のおのがじし塒もとむるに、雁の一つら二つらわたり行くなど、いはむかたなし。暮れはてても、猶行く水の色のみ遠白く殘りて、川添小田にいはへるみくまりの神のみあかしの、海人のいさりびともいふべく、かすかに見えわたるもあはれなり。

あきふけてこさめそぼふる隅田川たが墨がきのすさびなるらむ　（うけらが花）

二〇　芳宜園大人

村田春海

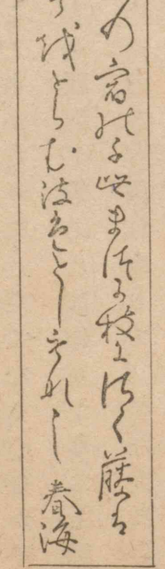
こゝに文化の五年九月八日、平春海謹みて芳宜園の大人の奥津城の御前に菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらを焚きて、うな

縣居
賀茂眞淵の家
江戸の濱町にあつた

筆蹟
三月蠶祝
この宿の千世ま
つか枝にさく藤
は春をとちむる
色としもなし
春海

ねつきて申さく。

あはれ悲しきかも。君は吾に十といひて一年のこのかみにおはするなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はまさにさかりの齢におはして、吾はまだ童にてぞ侍りける。常に縣居の庭に物まなびに行きかひたる時、あしたに參るとては君のみはかしの



村田春海筆

しりへに從ひ、ゆふべに罷るとては君の御袖のもとに縋りて、相うるはしみまつれること、親子はらからにも何か異ならむ。書讀むとては君を師とも尊み、歌作るとては吾をおとゝいのつらにぞ數へ給ひける。中頃にして、君は仕への道に暇なくおはし、

吾は世のさがにかゝづらひて、おのづから疎き方にも過ぎつるを、君つかへをしぞき給ひて後は、吾も同じちまたに移り住めば、花を尋ぬとては吾道しるべをなし、月を思ふとては君が舟に相乗り、憂き事も共に憂へ、嬉しき節も共に喜びて、世にありふるわざのまめごとも、あだごとも、かたみにへだてなく、心をかはせること今に二十年、その初を繰返し數ふれば、相友たること既に五十とせにぞ餘りける。　さるを今後れ奉りて、いつの世にか相見む、何れの時にかことはむ。　常なきは人の身の習ぞと知れど、これをいかでか歎かざらむ、かゝるを誰かはよく堪へむ。あはれ悲しきかも、文の林世々に衰へ、言の葉の道日々に下りゆけるを、賀茂の翁世に出でて、今をすてて、古に復り、青雲の高き心しらひを求め、倭文機の文あるみやびごとを貴みいへれど、くひぜを守り、舟にきだつくる輩、かれに泥みこゝにひかれて、尚怪しみ咎むる類は多く、たまあひてよくうけひく人なむ稀なりしを、君獨り心を起して、普く諭し、廣く誘ひしより、近き人は目のあたり相うづなひ、遠き人は遙かに靡き來て、古ぶりの歌世に盛になりにたるなり。　その自ら詠みいで給へる歌を見るに、古き調、新しき姿、とりく〳〵に備らざるはなし。　その古を寫せるは藤原寧樂の御世に及び、後のたくみに倣へるは堀河・鳥羽の御時に下らず。　心に思ふことは口に盡くさざることなく、目に觸るゝものは言葉に載せざることなむあらざりける。　これを見て、たかきもみじかきも、めでたふとまざる人なし。　又事好みの人は、その名を君に知られては、身の面おこしと思ひて世にも誇り、君の一歌を得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ深く喜びける。

くひぜを守り　宋人田ヲ耕スアリ。田中株ニ兎走リテ株ニ觸レ、頸ヲ折テ死ス。因テ其ノ耒ヲ守リ、釋キテ株ヲ守コリ、復兎ヲ得ンコトヲ冀フ。兎復得ベカラズ、而シテ身ハ宋國ノ笑ヒトナル。（韓非子）

舟にきだつく　楚ニ江ヲ涉ル者アリ、其ノ劍舟ヨリ水ニ墜チ、遽ニ其ノ舟中ニ刻シテ曰ク、是吾ガ劍ノ從リテ墜チシ所ナリト。舟止ル處ニ其ノ刻ヒシ水ニ入リテ之ヲ求ム。舟已ニ行ケリ、而カルニ劍ヲ求ムル此ノ若キハ、亦惑ハズヤ。（呂子春秋）

堀河・鳥羽　堀河・鳥羽の兩天皇

古事記
三巻
元明天皇の和銅五年(一七二)太安萬侶撰
我が國古代の神話・傳説を集めたもの
神の御ふみ
古事記

さるを、今黄金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬるは、わがどちの歎のみかは、大方の世の人の憂ともいひつべし。これをいかでか惜しまざらむ、かゝるを誰かは慕はざらむ。あはれ悲しきかも。わがかく言擧するを、泉の下にもさやかに聞し召し、天翔りても遙かに見そなはせとなむ申す。（琴後集）

二　縣居の大人の御さとし言　本居宣長

宣長三十あまりなりしほど、縣居の大人の教をうけたまはりそめしころより、古事記の註釋をものせむの志ありて、そのこと大人にも聞えけるに、さとし給へりしやうは、「われももとより神の御ふみを解かむと思ふ志あるを、そはまづ漢意（からごころ）を清くはなれて、古のまことの意（こころ）をたづねえずばあるべからず。然るにその古

萬葉
萬葉集
二十巻
奈良朝時代に出來た我が國最古の歌集

の意を得むことは、古言を得たるうへならではあたはず。古言を得むことは萬葉をよく明らむるにこそあれ。さる故にわれはまづもはら萬葉を明らめむとするほどに、すでに年老いて殘のよはひ今いくばくもあらざれば、神の御ふみを解くまでにいたることを得ざるを、いましは年さかりにて、行く先長ければ、今より怠ることなくいそしみ學びなば、その志遂ぐることあるべし。たゞし、世の中のものまねぶともがらを見るに、皆ひきき所を經ずて、まだきに高き所にのぼらむとする程に、ひきき所をだに得ることあたはず、まして高き所は得べきやうなければ、皆ひがごとのみすめり。このむねを忘れず心にしめて、まづひきき所よりよくかためおきてこそ、高き所にはのぼるべきわざなれ。わがいまだ神の御ふみをえ解かざるは、もはらこの故ぞ。ゆめ、

しなをこえて、まだきに高き所をなのぞみそ」と、いともねもごろになむ誡めさとし給ひたりし。

この御さとし言のいと尊く覺えけるまゝに、いよ〳〵萬葉集に心をそめて、深く考へ、繰返し問ひたゞして、古の意詞をさとり得て見れば、まことに世の物識り人といふものの神の御ふみ說ける趣は、みなあらぬ漢意のみにして、さらにまことの意をばえ得ぬものになむありける。（玉勝間）

二二　山庵雜記

北村透谷

北村透谷　名は門太郎　文學者　神奈川縣生　明治二十七年（一八九四）歿　年二十七

一

夢見まほしやと思ふ時、生憎に夢のなきことあり。夢なかれと思ふ時、うとましき夢のもつれ入ることあり。寤むる時亦かくの如し。意はざらんと思ふに意ひ、意はんと思ふに意はず。さりとて、意の如くならぬをば意の如くせましと思ふにもあらず。靜かに傾きなんとする月を見れば、よろづ意のまゝにならぬものぞなき。徐に咲出づらん花を待つに、よろづ心に任せぬものぞなき。如意却つて不如意、不如意却つて如意。悲しむも何かせん、歡ぶも何かせん。無心を傭ひ來つて、悲しみをも歡をも同じ意界に放ちやりてこそ、まことの樂しみは來るなれ。

二

早曉臥床を出でて、心は寤寐の間に醒め、意は意無意の際にある時、一鳥の弄聲を聽けば、忽として我、天涯に遊び、忽として我、塵界に落つる感あり。我に返りて後その聲を味はへば、凡常の野雀のみ。然るに我が得たる幽趣は地に就けるものならず。こゝ

バイロン
英國の詩人
（西暦一七八八―一八二四）

沙翁
シェクスピア
英國の大詩人
大戯曲家
（西暦一五六四―一六一六）

に於て私に思ふ、感應我を主として他を主とせざることを。

三

世にありがたき至寶は涙なるべし。涙なくては情もなからん、涙なくては誠もなからん。狂ひに狂へるバイロンには涙も細繩程の役に立たざりしなるべけれど、世間おほかたのものを繫ぎ留むるものはこの寶なるべし。情差ひ歡薄らぎたる間柄を緊め固うするもの、涙の外には求め難し。人世に涙あるは原頭に水あるが如し。世間若し涙を神聖に守る技に長けたる人を擧げて主宰とすることあらば、いたく悲しきことは跡を絕つに幾からんか。

四

「粗く斫られたる石にも神の定めたる運あり」とは沙翁の悟道なり。靜かに物象を觀ずれば、物として定運なきはあらず。誰か恨むべき神を知りそめたる、誰かかこつべき佛を識りそめたる。心を物外に描かんとするは未だし、物外物內何すれぞ悟達の別を畫がかん。運命に默從し、神意に一任して、こゝに始めて眞悟の域に達せんか。

五

他を議せんとする時、最も多く己の非を悟る。頃者激する所ありて生來甚だ好まざる駁擊の文を草す。草し畢りて靜かに內省するに、人を難ずる筆は同じく己を難ぜんとするに似たり。是非曲直輕々しく判じ難し。如かず、修養練磨してみだりに他人の非を測らざることをつとめんに。

六

カーライル
英國の文學者
（西暦一七九五―一八八一）

「大いなる『悔改』はまた一個の大信仰なり。罪の罪たるを知らざるより大いなる罪はなし。」とはカーライルに聞くところなり。昨日の非を知りて明日の是を期するは信仰に入る要諦にして、罪人の必ず自殺すべしとせざるは、これを以てなり。罪の重荷は忘れざるによつて忘るゝを得べし。忘れたる重荷はいつまでも重荷なり。「悔改」の生涯は即ち信仰の生涯なるか。

（透谷全集）

二三　求道

橋田邦彦
生理學者
醫學博士
元第一高等學校
長兼東京帝國大
學教授
文部大臣
明治十五年（一八八二）
鳥取市生

橋田邦彦

吾人が一日も忘れてはならないこと、寸刻も怠つてはならないことは道を求めることである。然るに多數の人々は久しくこれを忘れようとしてゐた。否、忘れてゐた。近時あらゆる方面に反省の機運が勃興し、求道の精神が到る處に澎湃として起つて來たかに見えるのは誠に喜に勝へないところである。吾々はこの傾向が單に傾向に止ることなく、求道の實の一日も早く擧らんことを望んで已まないと共に、これに向つて切に精進努力しなければならない。

この時に當つて考へられなければならない問題が多々あるが、その一は、自分の如く自然科學に從事するものが求道に直面して如何に處すべきかといふことである。由來自然科學者といはれる人々が求道を忘れて居ることは、往々他の方面の人士よりも却つて甚しいかに見える。しかし求道なくして自然科學者は眞の自然科學者たり得るであらうか。自分はその然らざるを信じて疑はないものである。

抑、求道とは具體的に道を把握することである。求道の道は單に文字に表された抽象的なものに止つてはならない。又把握といふことも、往々誤解されて居るやうに概念的理解に終つてはならない。具體的に把握するとは眞に自己のものとすることである。「行」によつて獲得することである。「行」とは人の全幅である心身を擧して學道するの謂である。即ち求道とは「行」が道を離れないやうに努めることである。尙進んでいへば、求道とは行道一如の獲得である。實際「求める」とはいふけれども、その實、道は求めて得らるゝ底のものではない。これに隨順することに精進することを「求める」といふのである。かしこに道あり、こゝに道ありと見聞知覺して、單に道の所在を知るのを「求める」といふのではない。「求める」とは道を歩み取ることである、道

を行ひ取ることである。即ち所謂「行取」を「求」といふのである。「行取」によつて始めて「行即道」の境地に達する。これが眞の求道である。即ち求道は始であつて終である。

近來儒教の研究、佛教の研究、或は神道の研究等、文字的研究が、或は講説に、或は著作に、到る處で盛にものされてゐる。人々の中にはこれが求道であるかに心得てゐるものがないではないやうであるが、求道は斷じてかゝる研究ではない。觀方によつては、かゝる研究も求道の一端であることを失はないではあらうが、少くとも求道は文字的研究に終つてはならないことは明らかである。求道とは所謂道を知識の對象として、その論理的構造等を究めることをいふのではない。所謂道を實踐即ち「行」に持ち來すことである、道を行ずることである。かくして道に隨

陽明先生
王守仁
陽明はその號
支那明代の儒者
陽明學の祖
嘉靖八年(一五二九)
卒
年五十七
仁仁を極め
「傳習錄」に見えてゐる

順することが「行」である。隨順するとは、道と一體不離となつて、道あつて他なきをその極とするものである。陽明先生の「仁仁を極め、義義を極むる」の謂である。實に人生と世界とは一如であつて、人に於て「行」であるものは、世界に於ては道である。「行」とは人の働きであり、道とは世界の動き、おのづからなる流動である。否、世界は流動そのものであり、人生は「行」に外ならない。即ち行道一如といふことは世界人生一如といふことである。この點は求道に志すものの深く省悟しなければならないところである。

我が國に於て求道が忘れられたのは、一に歐米文化の摸倣に急にして功利を旨としたが爲であつた。摸倣も創造も實に人の働きであつて、摸倣も一面から觀れば人生の創造といふことが

出來る。即ち摸倣が一轉すれば創造となるのであるけれども、摸倣が摸倣である限り創造としての働きは現れてゐない。摸倣といへば與へられたる知識を單に知識としてそのまゝ受入れることで、これ亦人の働きなくしては出來ない事であるけれども、働き即ち「行」が自覺に於て行ぜられてゐない。それが故に行道の一如を目指す求道といふことが忘れられ、徒に物識といはれて博覽多識を誇るが如き一種の功利的立場が自ら生じて來る。

明治年代の前後にかけて專ら摸倣に努められたものは主として自然科學であつた、所謂物質文明であつた。しかし自然科學乃至その齎す所の物質文明とても道を離れて成立し得るものではないことは、自然科學とても結局は世界の外のものではな

く、實にその一部であり、隨つて又人生の一部であることを考へれば直に理解出來ることである。即ち道はその一面として自然科學を包容し、「行」はその一端としてこれを創造する。故に自然科學だけが道を盡くすものではなく、人生を充たすものではない。然るにこれを考へ誤るとき、道又は「行」はその全としての機を失ふが故に、道又は「行」としての姿を晦ましてしまふ。自然科學が創造されつゝあるときでもさうである。況や自然科學の成果のみを取込むに急にして、成果の依つて來る所以を究むることに疎かである際には、尙更然りである。

しかし茲に最も注意を要することがある。求道に精進することはさることながら、道の一端に觸れただけで道の全體を會得したかの如く考へ誤つてはならないことである。しかもこの

衆善奉行
增一阿含經及び釋氏要覽等に見えてゐる語

事たるや多くの求道の士の陷つて知らざる所であるやうに思はれる。例へば自然科學的知識を豐富に所有するのみならず、これを利用し應用するに拔群の才能を有するものでも、人道に反してこれを惡用するものの如きは、自然科學者といふことは出來ない。同樣に道を求め得たといつても、例へば禪的修養によつて洒落自適の境地に達し、甕の如き膽を獲得したとしても、或は他力の信仰によつて確乎たる安心立命の境に達し得たとしても、大義名分に缺くるが如きものは眞の求道の士といふことは出來ない。僅かに道の光景を弄んでゐるといふに過ぎないといふべきである。かくの如きは似而非求道者に過ぎない。佛教では「衆善奉行、諸惡莫作、自淨其意、是諸佛教」といふ。實に有難い金言である。これこそ求道の要諦であつて、これを措いて

白居易　字は樂天　支那唐代の詩人　大中元年（八五七）卒　年七十五

道林禪師の一喝を喫した　白居易が鳥窠道林禪師に謁して佛法の大意を問うたとき禪師は言下に「諸惡莫作衆善奉行」と答へた　居易がそんなことは三つ兒も知ってゐるといふと禪師はこれを喝破して三つ兒もこれを言ふが八十の老翁も行ひ得ないといつた居易は深くその失言を陳謝し爾來深く禪師を崇敬した

道元　久我通親の子　我が國曹洞宗の開祖　勅賜承陽大師　建長五年（一二五三）寂　年五十四

他に求道の法はない。然しこの事たる容易なるが如くにして實に難事中の難事である。三歲の孩兒もよく言ひ得んも、八十の老翁も行ひ得ざる底のものであつて、白居易が道林禪師の一喝を喫した話は世にも有名である。この句で問題になることは、衆善とは何ぞ、諸惡とは何ぞといふことであるが、これは語に示す通り奉行すべきを衆善といひ、莫作なるべきを諸惡といふのである。即ち衆善とは、しなくてはならないことであり、諸惡とは、してはならないことであるといふことは出來るが、いざ具體的の問題となると、このやうなことで解決のつくものではなく、實に言詮の及ばない所である。一點の執着もない赤心の深底から起る聲を聞くより外はない。道元禪師の「諸惡莫作と聞ゆるなり。」といふ言葉が教へる所である。この「聞ゆる」といふ言

その意を誠にす　其ノ心ヲ正シクセント欲スル者ハ先ヅ其ノ意ヲ誠ニス（大學）

德の賊　論語に見えてゐる語

無爲而無不爲　老子の語

葉は實に深い求道の結晶である。「自淨其意」にして始めて得られる。「其の意を誠にす」といふはこれである。自分の如き單に一介の自然科學者として尙未だこの要諦を行取し得ないことを遺憾とし且恥ぢてゐる似而非求道者に過ぎないものが彼是いふのは德の賊たるに墮するものであらうが、自分は自然科學的研究に從事するに當つて常にこの金言の服膺を志してゐる。自他を僞らざる虛心を以て、奉行すべき諸善を奉行し、莫作なる諸惡を莫作する以外に研究實行の方法はないことを切に體得してゐる。これは即ち佛敎ではないか、道ではないか。實に聞かんと欲する心なくして「奉行莫作」の聲を聞くのでなければ眞の研究は實現しない。そのためには「自淨其意」の外に道はない。學者は自己を忘れなければならない、「無爲而無不爲」の境地に到

らねばならない所以である。かくして自然科學に從事するものは自然科學的研究の外に道を求める要はない。實に「常事是學」である。求道に切なるものは到る處に學することが出來る。學するとは道を學ぶのである。實に道は人を離れずである。しかしながら求めざるものに對しては道は常にその姿を晦ましてゐる。たゞ所謂自然科學的研究さへ行つて居れば道が得られるものと考へ誤つてはならない。「常時是學」の立場に於ける自然科學的研究といふのは、實は一面に於てあらゆる學道を學道することである。又自然科學的研究によつて、よし道の一端を窺ひ得たとしても、これを以て大道に通達せるものと思ひあがつてはならないことは言ふまでもない。「常事是學」を體得しない自然科學者は眞の自然科學者とはいへない。而して「常事是學」の體得とは求道に徹するの謂に外ならない。即ち自然科學者は自然科學的求道者でなければならない。かれの研究室はかれの道場である。否、世界がかれの道場である。天地間のあらゆる事物がかれの學道であるとき「唯從自然」を悟得した眞の自然科學者が現成する。自然科學者は人である。（空月集）

中學國文教科書　卷九　終

昭和十二年二月二十七日　初版印刷
昭和十二年八月三十日　初版發行
昭和十三年二月二十日　訂正再版印刷
昭和十三年十二月十五日　訂正再版發行
昭和十六年十一月十四日　訂正三版印刷
昭和十六年十一月十七日　訂正三版發行

著作者　吉田彌平
補訂者　石井庄司
發行者　東京市麹町區飯田町二丁目二十番地　中等學校教科書株式會社　代表者　山本慶治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　大日本印刷株式會社　石村勳

中學國文教科書　全十冊
定價各金六拾錢

發行所　東京市麹町區飯田町二丁目二十番地　中等學校教科書株式會社
日本出版文化協會會員番號　一一七五二二

（略名）吉田國語

日本出版配給株式會社　元配給
東京市神田區淡路町二ノ九